

都農町文化財調査報告書第4集

黒石遺跡

ふるさとづくり特別対策事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1992



宮崎県児湯郡

都農町教育委員会

都農町文化財調査報告書第4集

黒石遺跡

ふるさとづくり特別対策事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

宮崎県児湯郡
都農町教育委員会

序

この報告書は、平成3年度都農町ふるさとづくり特別対策事業に伴い、都農町長の委託を受けて平成3年6月10日より同年8月14日まで、都農町大字川北藤見地区に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の記録であります。

この発掘調査の結果、縄文土器、石鏃、磨石等の遺物と集石遺構が発見されました。

これらの文化財を適切に保管し、様々な分野で資料として広く活用されることが、郷土の歴史的遺産として後世に伝え残すための最も有効な手段と考えます。本書の刊行が町史解明の貴重な資料となることは、郷土へ対する理解と愛情を深めるものとして、まことに意義深いものがあります。開発と文化財の保護に思いをいたし、本書が今後の生涯学習の発展にも寄与すれば幸いります。

最後に調査に御協力いただきました関係各位に深甚の謝意を表しますとともに、積極的な御尽力をいただきました地元の方々に心から厚く感謝申し上げます。

平成4年3月

都農町教育委員会
教育長 守部 寛

例

言

1. 本書は、都農町のふるさとづくり特別対策事業に伴い、平成3年度に実施した黒石遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 遺跡の所在地は、児湯郡都農町大字川北11760番地外（都農町大字藤見字黒石）である。
3. 調査期間は平成3年6月10日から平成3年8月14日まで実施した。
4. 現地の実測図は、吉永真也が行った。
5. 出土遺物については、岩永哲夫氏、吉本正典氏（県教育委員会文化課）、小野信彦氏（北方町教育委員会）の御教示を得た。
6. 遺物の復元作業は、金丸久美が行った。
7. 遺物の実測、製図及び写真撮影は吉永・金丸が行った。
8. 本書の執筆、編集は吉永が行った。
9. 出土遺物は都農町教育委員会で保管している。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第2章 遺跡の立地と調査概要	2
第1節 立地と環境	2
第2節 基本層序について	4
第3節 調査の概要	5
第3章 調査の成果	6
第1節 A区の遺物と遺構	6
1. 層序	6
2. 土器	6
3. 石器	12
4. 集石遺構	22
第2節 B区の遺物と遺構	22
1. 層序	22
2. 土器	22
3. 石器	37
4. 集石遺構	48
第4章 まとめ	50

挿 目 次

第1図	黒石遺跡周辺の分布図	3
第2図	土層模式図	4
第3図	A区土層図	7
第4図	A区遺物出土分布図	9
第5図	A区土器実測図	10
第6図	A区石器実測図	13
第7図	A区石器実測図	14
第8図	A区石器実測図	15
第9図	A区石器実測図	16
第10図	A区石器実測図	17
第11図	A区石器実測図	18
第12図	A区石器実測図	19
第13図	B区遺物出土分布図	23
第14図	B区土層図	24
第15図	B区土器実測図	27
第16図	B区土器実測図	28
第17図	B区土器実測図	29
第18図	B区土器実測図	30
第19図	B区土器実測図	31
第20図	B区石器実測図	38
第21図	B区石器実測図	39
第22図	B区石器実測図	40
第23図	B区石器実測図	41
第24図	B区石器実測図	42
第25図	B区石器実測図	43
第26図	B区石器実測図	44
第27図	B区石器実測図	45
第28図	B区1号集石実測図	49

表 目 次

土器觀察表(1)	A区	11
石器計測表(1)	A区	20
石器計測表(2)	A区	21
土器觀察表(2)	B区	32
土器觀察表(3)	B区	33
土器觀察表(4)	B区	34
土器觀察表(5)	B区	35
土器觀察表(6)	B区	36
石器計測表(3)	B区	46
石器計測表(4)	B区	47

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

都農町では、藤見台地と隣接する牧内台地周辺一帯で、町民はもとより近隣市町村住民の憩い・休息・散策等の場として、あるいは自然とのふれあいなど、地域住民の安らぎの場として自然体験型施設の整備を行い、地域の活性化を積極的に図るとともに、農村部住民と都市部住民とのふれあいを図ることを目的とし、平成2年度よりふるさとづくり特別対策事業として草スキー場、駐車場、補助幹線道路等の整備を企画した。特に平成3年度は、駐車場と補助幹線道路の一部が着工となるため早急な埋蔵文化財等の文化財の有無の確認が必要とされた。

駐車場整備予定地は、昭和62年度の『都農町遺跡詳細分布調査報告書』によると、白水遺跡、京塚遺跡、黒石遺跡のちょうど接点に当たり、牧内台地の南麓に位置しており埋蔵文化財の所在が予想された。そのため、都農町長から町教育長へ文化財の所在の照会があり、町教育委員会では、県文化課主査北郷泰道氏の協力を得て踏査を行い焼石等の存在を確認した。そのため平成3年4月25日、26日の両日に試掘調査を行い、A・B両区から縄文早期の土器片を採集し、B区では集石遺構の一部も確認された。以上の調査結果からA・B両区には縄文早期の遺跡が所在することが確認された。

町教育委員会では試掘調査の結果にもとづき、町長部局と遺跡の保護について協議を重ねたが、事業施工上、遺跡の大部分が現状で保存することは困難であったため、工事着手前に発掘調査を町教育委員会が平成3年6月10日から同年8月14日まで実施するに至った。

第2節 調査の組織

総 括	都農町教育委員会	守 部 寛
	教 育 長	黒 木 正 浩
	社会教育課長	河 野 吉 孝
	社会教育課長補佐	綾 寛 光
	社会教育主事	河 野 恵 吉
	同	
庶務・会計	社会教育課主事	永 田 日登美
	建設課主事	河 野 美津子

調査担当	社会教育課主事	吉永真也
調査協力	宮崎県教育局文化課 埋蔵文化財係長 同 主事 北方町教育委員会 上事	岩永哲夫 吉本正典 小野信彦
発掘作業員	黒木初美、河野吉夫、河野安雄、河野良雄、山本房義 岩本すみよ、九鬼武夫、中野 登、神崎五月、薄田恭子 田中夏代、坂東順子、海野初美、吉井健一朗、西尾トミコ	
整理作業員	吉井健一朗、金丸久美	

発掘調査にあたっては、連日炎天下の中作業に参加していただいた地元の方々をはじめ、調査に深いご理解をいただいた関係者の方々に対して記して感謝します。

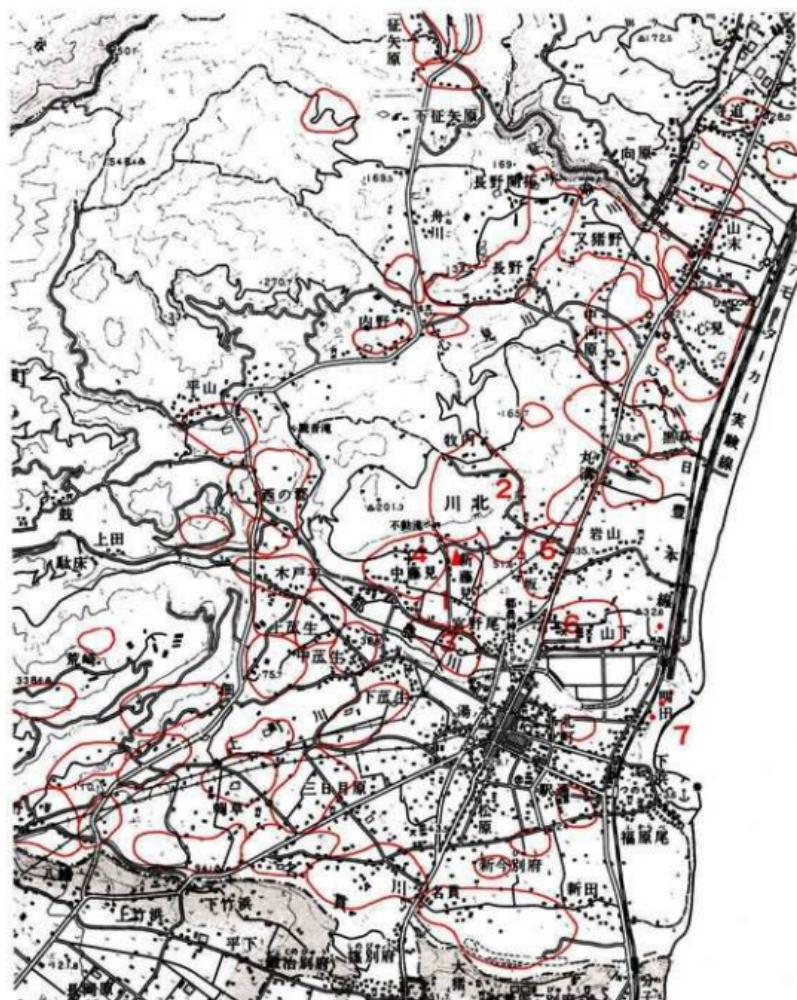
第2章 遺跡の立地と調査概要

第1節 立地と環境（第1図）

黒石遺跡は、児湯郡都農町大字川北11760番地外（都農町大字川北字黒石）に所在する。

この地域は牧内台地（標高201m）から緩やかな丘陵が南東に延びて海岸まで至っている。遺跡はこの丘陵の付け根、牧内台地の南麓に位置し、標高約55m、比高10mである。遺跡の側には不動の滝や白水の滝などがあり、水利に富んだところである。

当遺跡の周辺には、北に弥生～古墳の白水遺跡（大字川北字白水、尾ノ下）、西に旧石器～古墳の京塚遺跡（大字川北字京塚、藤見尾ノ下）、南は弥生の師匠田遺跡（大字川北字師匠田）、東は弥生～古墳の境ヶ谷第2遺跡（大字川北字境ヶ谷、白石）、同じく弥生時代後半の境ヶ谷第1遺跡（大字川北字境ヶ谷）、古墳時代初頭の中原遺跡がある。特にこの境ヶ谷第1遺跡では、昭和40年代半ばに宮崎大学と石川恒太郎氏による発掘調査で2軒の堅穴住居が確認され、鉄器（範）及び千点を越える弥生土器も出土している。また昭和64年に周溝の幅0.9m～1.3mで6.2m×5.8m



第1図 黒石遺跡周辺の分布図

- | | | | |
|------------|---------|-------------|---------|
| 1. 黒石遺跡(▲) | 2. 白水遺跡 | 3. 師匠田遺跡 | 4. 京塚遺跡 |
| 5. 境ヶ谷第1遺跡 | 6. 中原遺跡 | 7. 都農古墳群(●) | |

1001	篠別府遺跡	1020	中河原遺跡	2018	井手ヶ平遺跡
1002	新別府下原遺跡	1021	鎧治屋敷遺跡	2019	上黒萩遺跡
1003	新別府遺跡	1022	鹿牟田遺跡	3001	内野下原遺跡
1004	新別府肥遺跡	1023	上芦生遺跡	3002	内野遺跡
1005	新別府川原遺跡	1024	木戸平第1遺跡	3003	舟川中原遺跡
1006	下原遺跡	1025	木戸平第2遺跡	3004	又猪野原遺跡
1007	竜ヶ平第1遺跡	1026	森遺跡	3005	心見住還上遺跡
1008	竜ヶ平第2遺跡	1027	相見遺跡	3006	山末大原第1遺跡
1009	立野遺跡	1028	福原尾遺跡	3007	山末大原第2遺跡
1010	尾立遺跡	2005	川神田遺跡	3008	宮川遺跡
1011	俵石第1遺跡	2006	西ノ郡第1遺跡	3009	心見遺跡
1012	俵石第2遺跡	2007	西ノ郡第2遺跡	3010	長野遺跡
1013	朝草原遺跡	2008	平山遺跡	3011	舟川尾立遺跡
1014	湯牟田遺跡	2012	久次牟田遺跡	3012	下征矢原遺跡
1015	桜土手遺跡	2013	白石第1遺跡	3013	上征矢原遺跡
1016	後谷遺跡	2014	白石第2遺跡	3014	東平遺跡
1017	芦生尾立第1遺跡	2015	旧牧跡第1遺跡	3015	寺迫下原遺跡
1018	芦生尾立第2遺跡	2016	旧牧跡第2遺跡	3016	中村遺跡
1019	馬場口遺跡	2017	松ヶ鼻山遺跡		

第1表 遺跡地名表

の隅丸方形プランの周溝状遺構が1基確認されており、平成3年にもほぼ同規模の周溝状遺構が確認されている。今回発掘調査を行った黒石遺跡でも調査区以外の近隣する畠地から弥生土器が表採されたほか、周辺地域でもかなり多数の遺物表採が行われており、牧内台地周辺地域が古代から人々の生活の移り変わりを、永年にわたって行ってきたことを示すものである。

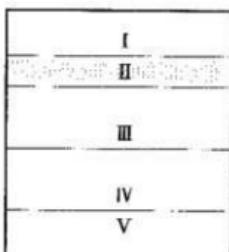
第2節 基本層序について（第2図）

当遺跡では、合計5層が確認された。しかし、調査区はかなり削平をうけている部分が多く、特にB区は過去に造園用の樹木が栽培されており土壤の入れ替え等が行われていた。そのためA区西側の壁を参考にした。基本層序は次のとおりである。

I層 耕作土

II層 明橙褐色土層

鹿児島県の鬼界カルデラを噴出源（約6,400年前）とし、通称アカホヤと呼ばれる火山灰層である。



第2図 上層模式図

- III層 暗茶褐色粘質土層 粘質を帶び比較的かたくしまる。遺物包含層である。
- IV層 明茶褐色粘土層 粘性を帶びかたくしまる。遺物包含層である。
- V層 黄褐色粘土層 粘性が大きくかたくしまり、人頭大の礫が含まれる。

第3節 調査の概要

黒石遺跡（都農町大字川北字藤見）は、宮崎市の北北東約40kmの牧内台地を北に臨む標高55mに位置する。

ふるさとづくり特別対策事業に伴って都農町教育委員会が平成3年4月25日、26日の両日に試掘調査を行った結果、遺跡が1ヶ所確認されたので、平成3年6月10日～同年8月14日までの約2カ月間で約5,000m²の発掘調査を同町教育委員会が行った。

南北方向（基準杭列は真北方向）で10m方眼のグリッドを設定し、北の牧内台地側からA・B区とした。発掘調査の順番はB区より開始した。

A・B区のはば中央に南北、東西と長さ約10m、幅1mのトレンチを十字に入れて試掘調査を行ったところ、縄文早期の土器片が出土し、B区では集石遺構も確認された。

A区（2,000m²）では山形や橢円形の押型文土器が約200点、打製石鎌や磨石、敲石やスクレイバーなどの石器が数十点出土し、直径が0.8m～1mの集石遺構を2基検出した。2基とも火を受け赤色に変色しているのが観察された。またアカホヤ層も上部の一部を耕作により削られているだけで大部分残りも良く、北側（牧内台地側）の一部を除いた調査区の大部分で確認できた。

B区（3,000m²）では山形、橢円形の押型文土器や貝殻条痕土器が約300点、打製石鎌や磨石などの石器が数十点出土した。また、ここからは直径82cmの集石遺構が1基確認された。ほとんどの礫が火を受け赤色に変色していた。しかし、ここからはアカホヤ層の残存は確認できなかった。このB区では戦後直後、住宅が1棟建築されており、その当時の基礎の掘り込み跡がいたるところにあり、当時使用していたと思われる井戸跡もあった。それから宅地の後は、造園用の樹木が調査直前まで植えられており、これもいたるところに植え込み用の穴があった。

第3章 調査の成果

第1節 A区の遺物と遺構

1. 層序

A区は東西に走る町道の北側（牧内台地側）に所在しており、標高が約58mで、北（牧内台地）から南に緩やかに傾斜した場所である。ここでの層序は次のとおりである。

I層：黒色土層（耕作土層）。

Ia層：黒茶褐色土層（耕作土層）。現在の耕作土（I層）以前の耕作土。

II層：明黄色土層（アカホヤ火山灰層）。10~25cm。耕作により上部が削られている。場所によっては全て耕作で削られている。

IIa層：暗黄色土層（二次堆積アカホヤ火山灰層）。牧内台地からの流れ込みと思われる。8~20cm。

III層：黒茶褐色土層。8~20cm。やや粘質を持つ火山灰層で、下部より遺物の包含が認められる。拳大の礫を少數含む。

IIIa層：暗茶褐色土。6~13cm。やや粘質の火山灰層。遺物を極めて少量含むが人頭大以上の礫が現れる。

IV層：明茶褐色土。20~37cm。粘質の強い火山灰層で、硬くしまる。人頭大の礫を含む。

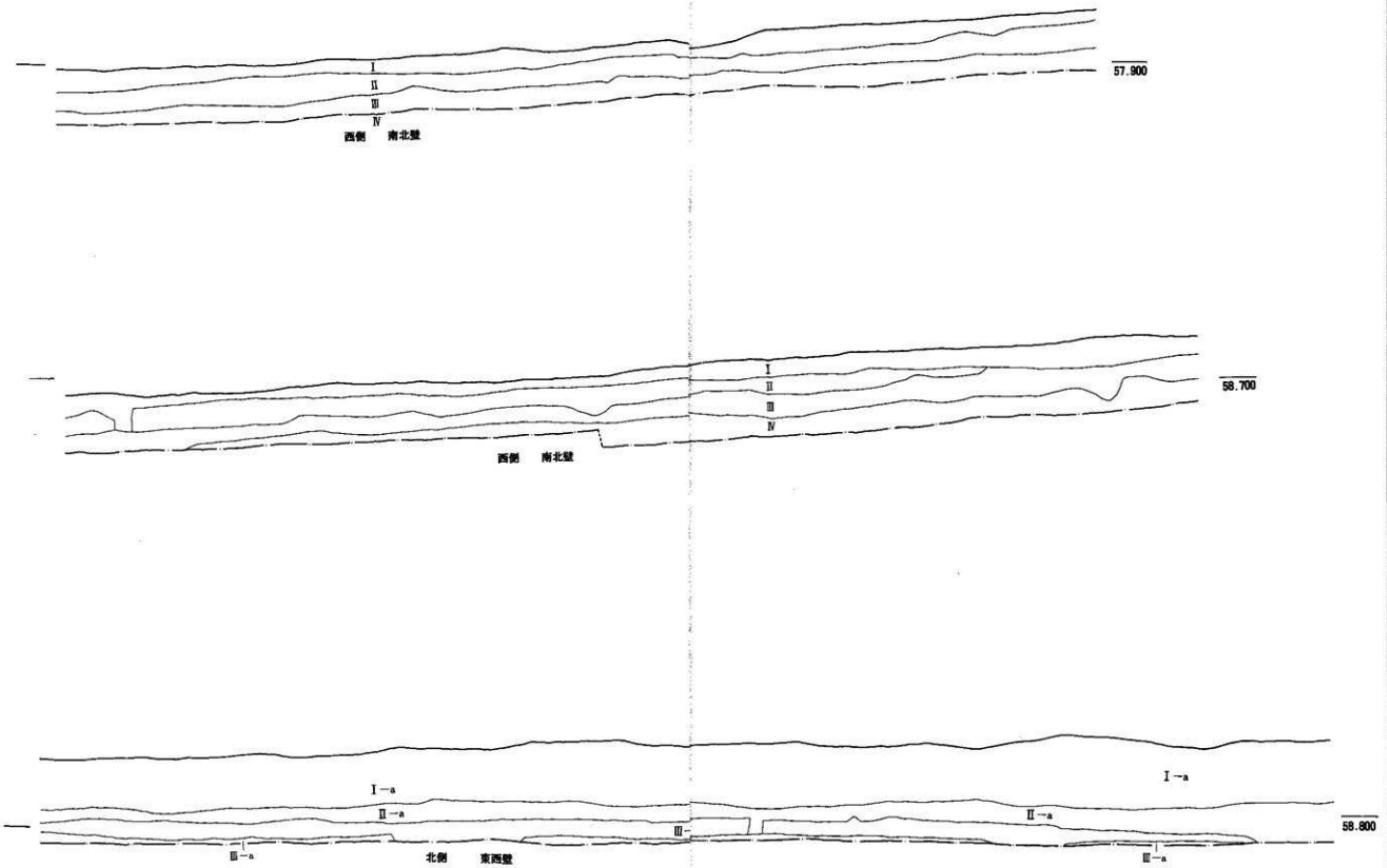
2. 土器

ここからは上に、アカホヤ層（II層）下より押型文系土器（山形・楕円）と貝殻文系土器（条痕文・刺突文）が出土した。

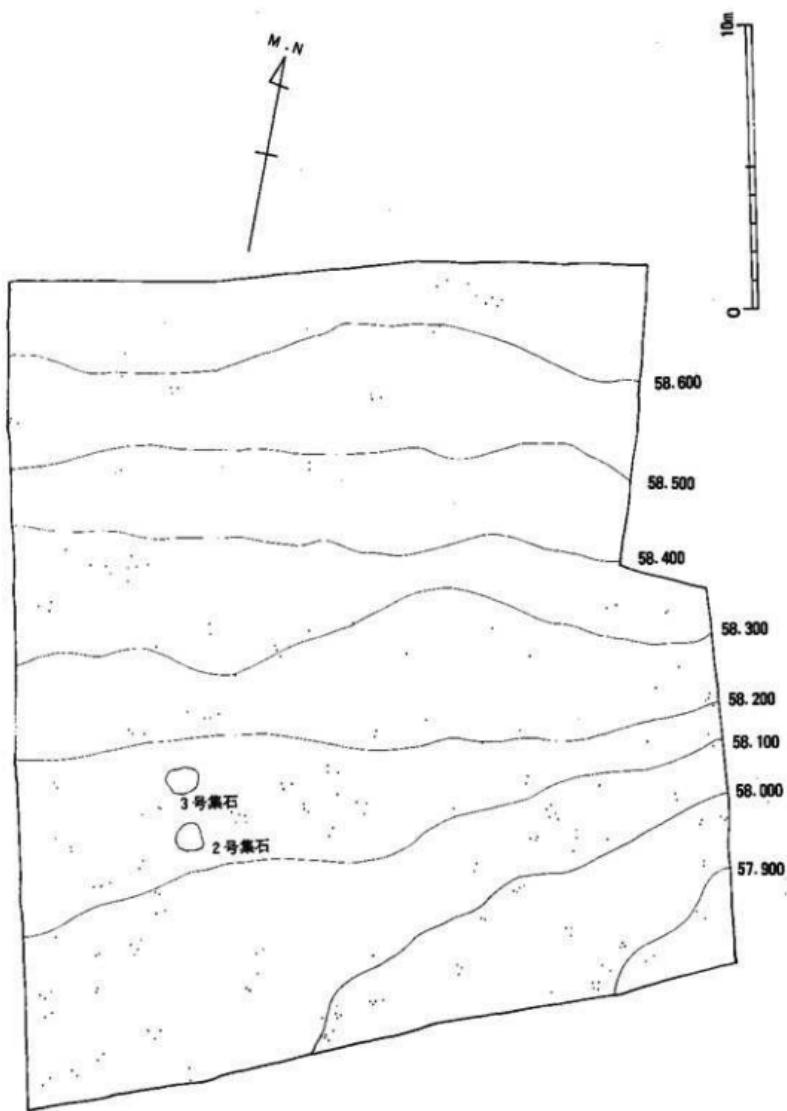
山形押型文は文様を縦方向に施すタイプ（2~3）である。2は口縁が直行し、内外面とも全体にやや細かい文様を施す。3は口縁がごくわずかであるが外反し、外面はやや厚みのある文様を施す。内面は口唇部から頸部のみに文様を施す。また、頸部に外面からの片面穿孔を有する。

楕円形押型文では4の1点のみであるが、口縁がごくわずかであるが外反し、外面には縦方向の丁寧な文様を全体に施す。内面はナデ調整される。

貝殻条痕文は1と5で、ともに横方向である。1は口縁が直行し、外面はほぼ全体

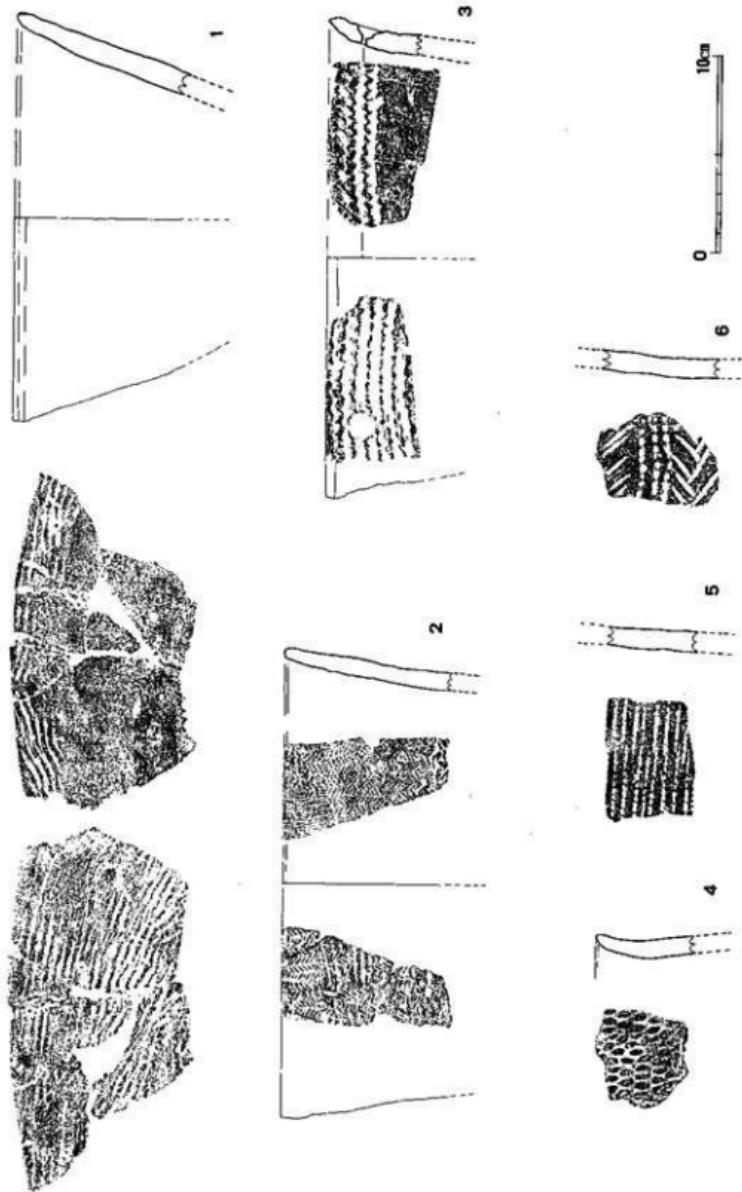


第3図 A区 土層図



第4図 B区 遺物・遺構分布図

第5図 A区 土器実測図



土 告 錐 及 び 文 様 細 表 (1) A 区

区面番号	器種	器部	外 面		内 面		燒成	色 調	胎 土	備 考
			口縁部	脚部	口縁部只袋条痕文	ナ テ				
1 A	鉢	口縁部 脚部	貝袋条痕文	ナ テ	良	"	"	明赤褐色	1:灰褐色(火照合)。	風化が著しい。
2 A	"	"	やや細かい山形 押型文	やや細かい山形 押型文	"	"	"	"	0.5~2:白褐色 (火照合)。	穿孔有り。
3 A	"	口縁部 頸部	厚みのある山形 押型文	口縁部に厚みの ある山形押型文	"	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色	白・黄褐色(火照合)。	0.5~2:白褐色 (火照合)。	
4 A	"	"	絞方向のややきわ 秽文	ナ テ	"	橙 色	橙 色	3.1~5.1:白褐色 (火照合)。	0.5~1:白褐色 (火照合)。	
5 A	円筒形	脚部	貝袋条痕による 平行文	"	"	灰 黄 色	灰 黄 色	0.5~1:白褐色 (火照合)。	0.5~1:白褐色 (火照合)。	
6 A	鉢	脚部	横軸形(頭跡付) 横 帯の平印(火照合)	"	"	反黃褐色	反 黄 褐 色	白・黄褐色(火照合)。	0.5~1:白 褐色(火照合)。	

に文様を施す。内面は口唇部のみにやや波状がかった文様を施している。5はほぼ平行な文様を施している。

貝殻刺突文は6の1点のみである。文様は外面のみで横方向に平行な刺突文を3本施し、その上下に横ハの字の刺突文を施す。この平行文と横ハの字文を交互に施すと思われる。

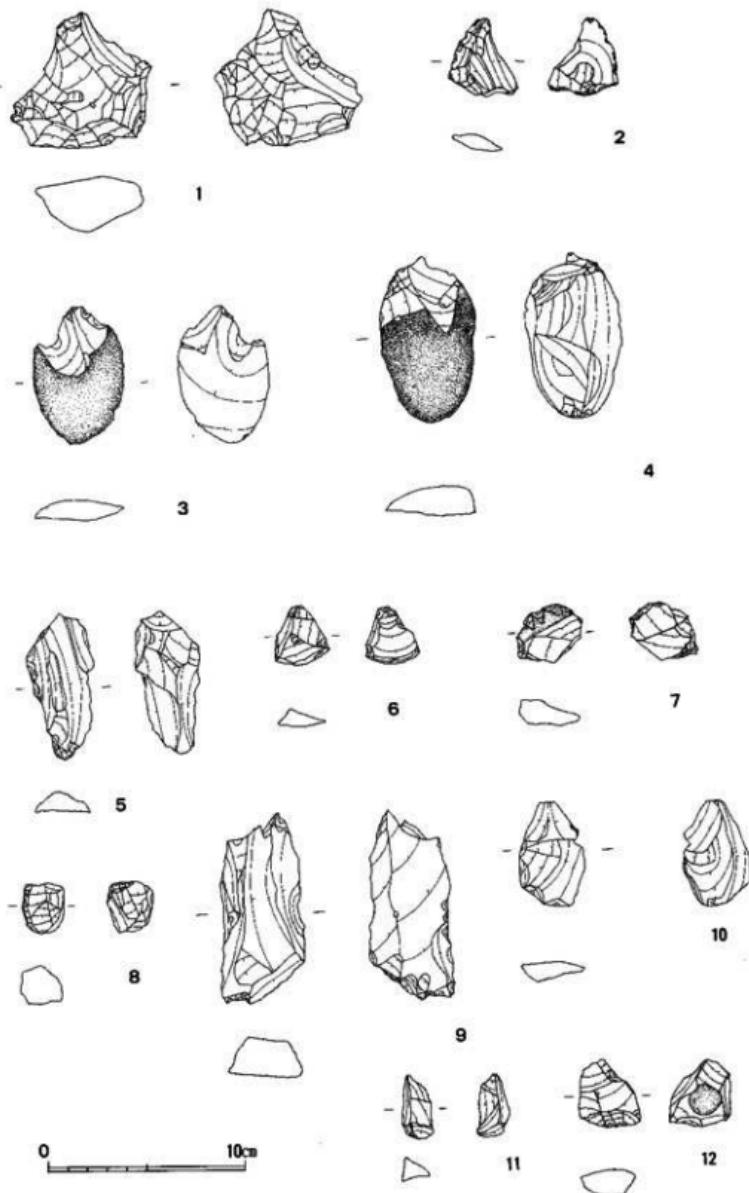
3. 石 器

ここから出土した石器は、剥片・使用痕のある剥片・加工痕のある剥片が中心で、その他に石核・石鏃・磨石・水晶がある。

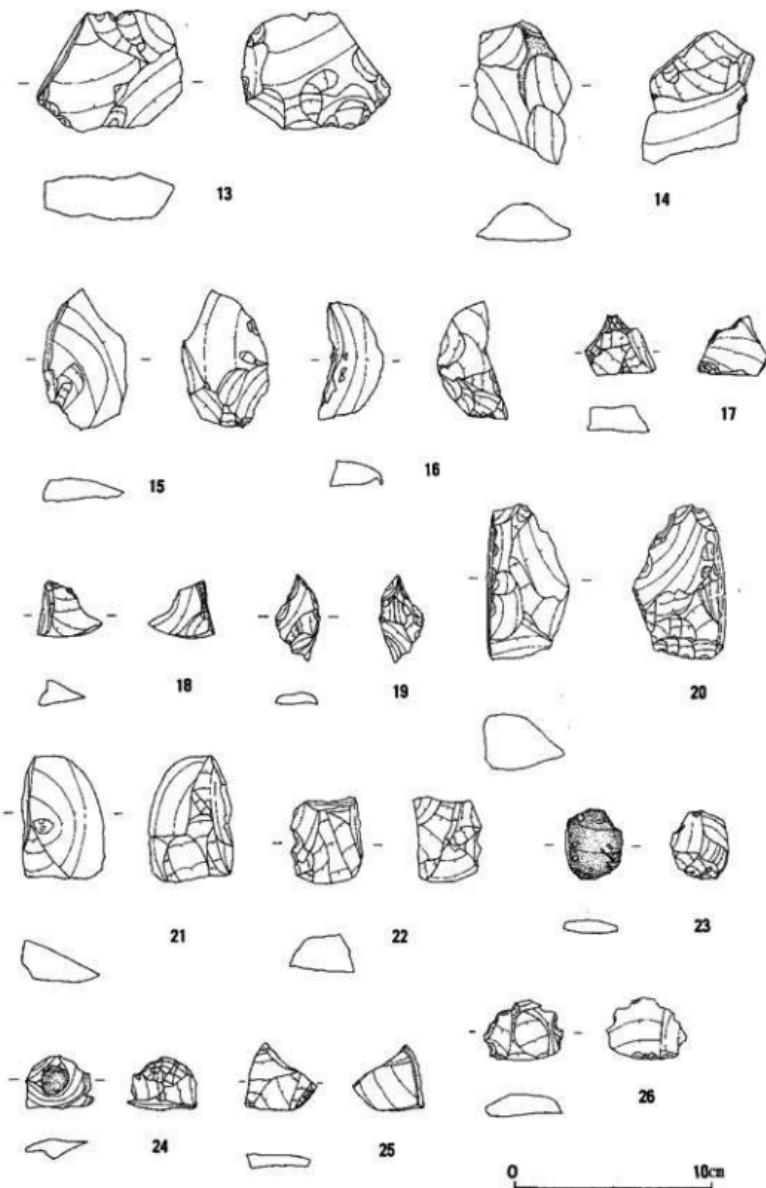
1は石核で石材は流紋岩である。2は使用痕のある剥片で、最大厚が0.8cmの薄いもので流紋岩製である。3~4は安山岩製の剥片である。共に片面に自然面を残す。5~7は流紋岩製の剥片で、7のみ自然面を残す。8は剥離痕のある水晶で、装飾品としての加工痕は見られない。9は安山岩製の剥片でかなり大きいものである。10~14は流紋岩製の剥片で、12は片面の一部に自然面を残す。13はかなり大きいものである。15は頁岩製の剥片である。16~29は流紋岩製の剥片で、21と29は使用痕を有する。23は片面に、24は片面の一部に自然面を残す。30は安山岩製の剥片で、片面に自然面を残す。31は流紋岩の石核である。32は安山岩製の剥片である。34は砂岩製の剥片で片面に自然面を残す。33、35~48は流紋岩製の剥片で、36は使用痕を有しており最大厚も0.7cmと薄いものであり、片面に自然面を残す。37は使用痕を有する。38は加工痕を有し、片面に自然面を残す。40は使用痕を有する。42は片面に自然面を残す。43は一部加工痕を有する。47は使用痕を有する。48は片面に自然面を残す。49は安山岩製の剥片で、片面に自然面を残す。50~52は流紋岩製の剥片で、52は使用痕を有する。53は流紋岩で最終段階の石核であると思われる。54~58、60は流紋岩製の剥片で、56は使用痕を有する。59はチャート製の剥片である。

61、63~69はチャート製の石鏃で形態的には凹基式に入る。61は抉りは浅いが長身である。64は脚部端を意識的に除去している。65はやや特殊な形をしている。62は唯一の安山岩製で、かなり丁寧な加工が施してある。抉りもやや深いものと思われる。70~72は円基式で、石材の都合から断面が三角形を呈する粗い加工のもの(70)もあり、作りは全体的に雑である。

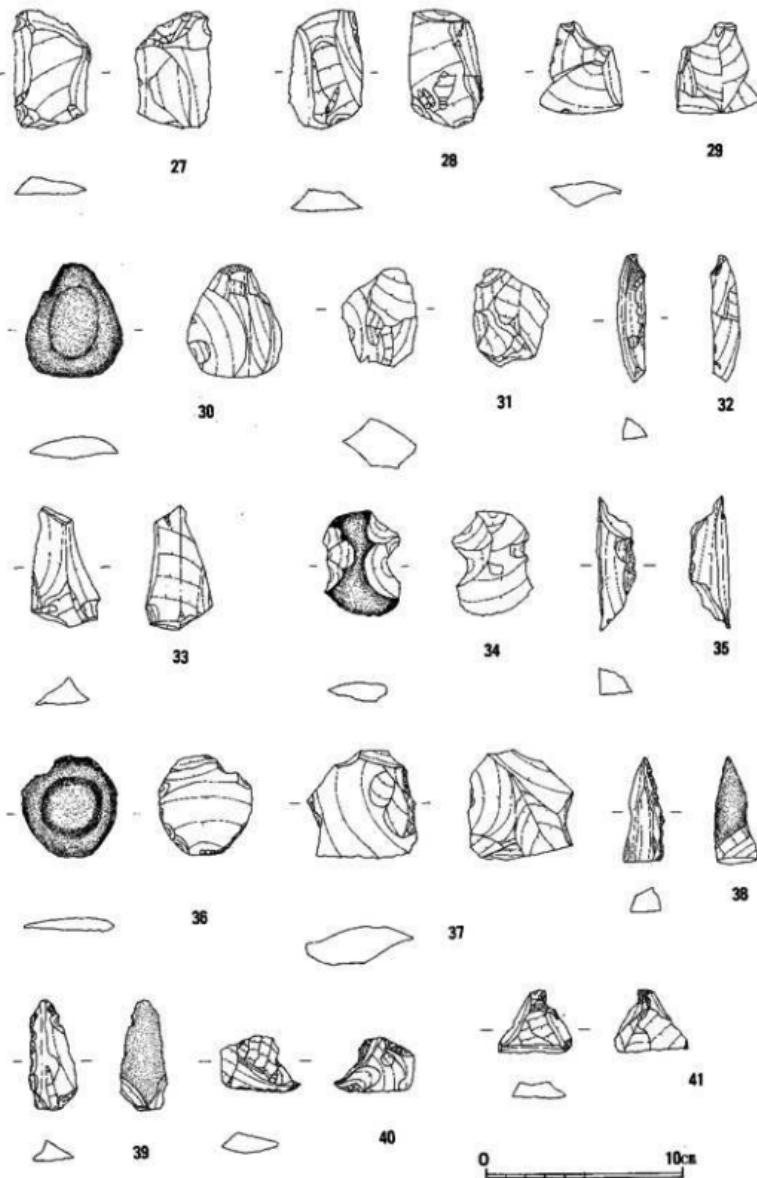
73~75は尾鈴山産の溶結凝灰岩による磨石である。3点とも両面使用である。73は手のひらに入り切るほどの小型のもので、ほぼ円形で使用面は両面とも偏平である。74は最大長が9.8cm、最大幅が9.5cm、最大厚が4.1cm、重量が510gと中型のもので、ほぼ円形である。使用面の片面は偏平で片面はやや丸みをおびている。75は最大



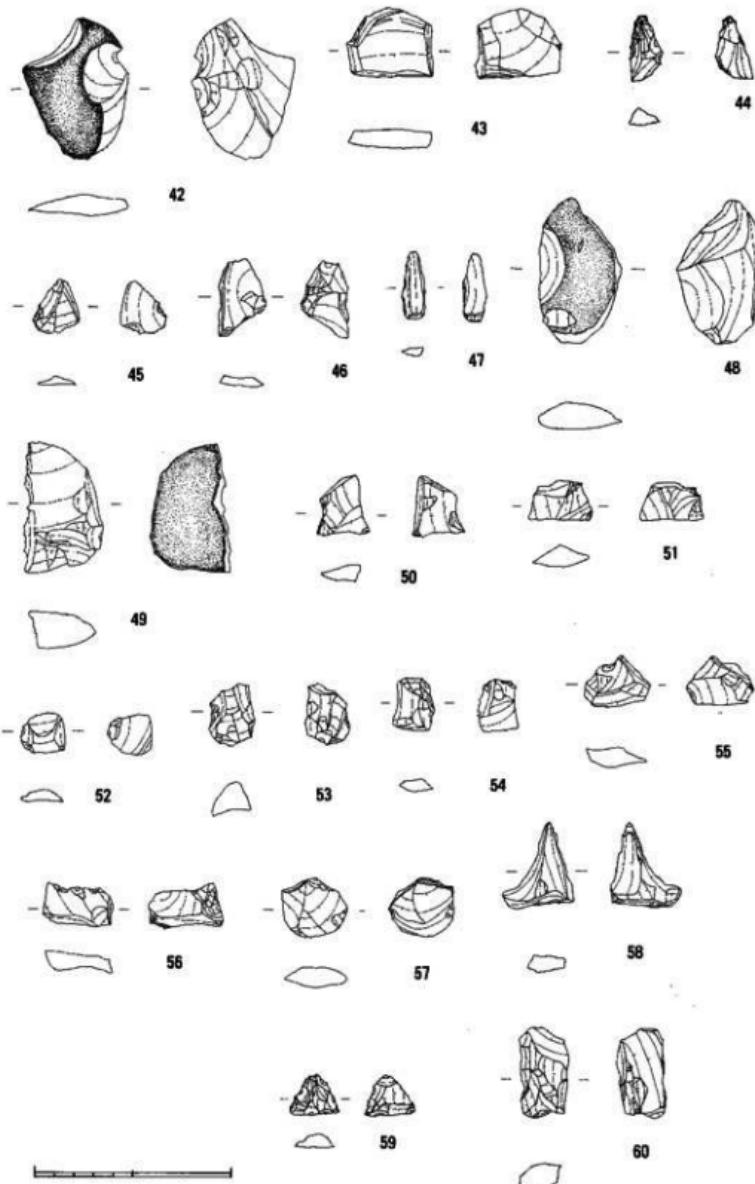
第6図 A区 石器実測図



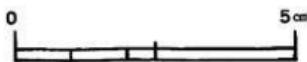
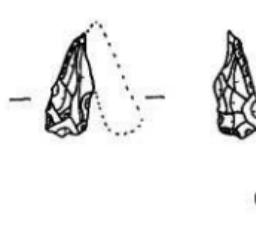
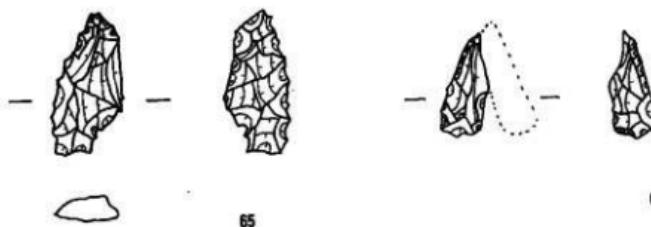
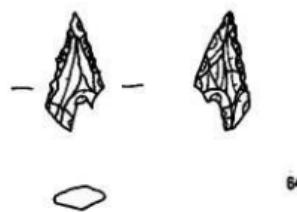
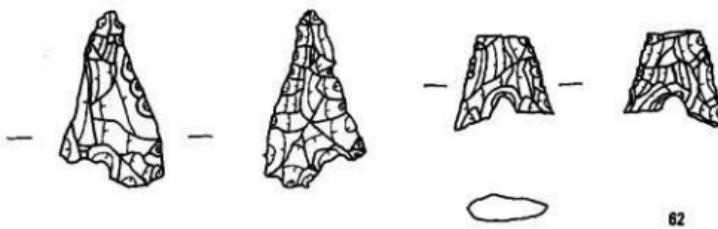
第7図 A区 石器実測図



第8図 A区 石器実測図



第9図 A区 石器実測図



第10図 A区 石器実測図

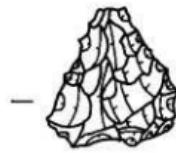


67

68

69

70

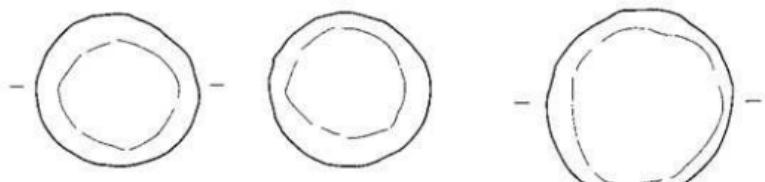


71

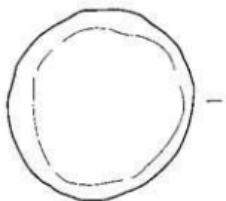
72



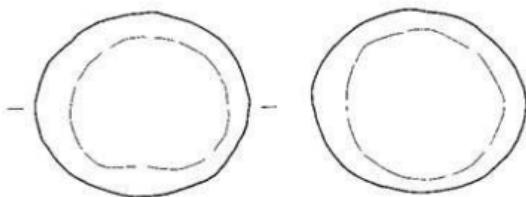
第11図 A区 石器実測図



73



74



75



第12図 A区 石器実測図

△ 区 测量表									
番号	種別	最大長(cm)	最大幅(cm)	重(g)	最大厚(cm)	石 材	備 考	番号	種別
1	石核	7. 6	7. 0	11.5	2. 6	流紋岩		23	剥 片
2	剥 片	4. 3	3. 5	1.0	0. 8	使用痕有り		24	"
3	"	7. 0	4. 6	3.0	1. 0	安山岩		25	"
4	"	8. 4	4. 8	6.5	1. 4	"		26	"
5	"	7. 3	3. 3	2.0	1. 0	流紋岩		27	"
6	"	3. 0	2. 7	9	0. 9	"		28	"
7	"	3. 8	2. 6	1.1	1. 1	"		29	"
8	-	2. 5	2. 2	1.5	2. 0	水 雷 剥離痕有り		30	"
9	剥 片	10. 0	4. 2	9.0	1. 9	安山岩		31	石 棱
10	"	5. 4	3. 5	1.5	0. 8	流紋岩		32	剥 片
11	"	3. 2	1. 5	5	1. 1	"		33	"
12	"	4. 7	3. 5	1.0	1. 2	"		34	"
13	"	7. 9	6. 0	12.0	2. 6	"		35	"
14	"	7. 4	5. 3	5.8	1. 6	"		36	"
15	"	7. 1	4. 3	3.1	1. 1	直 岩		37	"
16	"	6. 0	2. 7	2.0	1. 2	流紋岩		38	"
17	"	3. 6	3. 1	2.0	1. 4	"		39	"
18	"	3. 4	2. 7	9	1. 4	"		40	"
19	"	3. 8	2. 5	1.3	0. 8	"		41	"
20	"	7. 7	4. 1	11.0	2. 6	"		42	"
21	"	6. 7	4. 1	4.8	1. 7	"		43	"
22	"	4. 8	3. 6	3.2	1. 8	"		44	"

番号	種別	石			岩溶			溶洞			岩十			洞測			（2）			A区			備考			
		最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重量 (kg)	最大厚 (mm)	石	村	備	番号	種別	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	重量 (kg)	最大厚 (mm)	石	村	備	番号	種別	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	重量 (kg)	最大厚 (mm)			
45	剥片	2.8	2.5	8	0.5	流紋岩			67	石 繖	1.7	1.2	(0.3)	0.4	チヤー卜											
46	"	4.0	2.3	1.2	0.4	"			68	"	1.7	1.1	(0.6)	0.35	"											
47	"	3.5	1.2	5	0.5	"	使用痕有り		69	"	1.9	1.15	(0.5)	0.4	"									"		
48	"	7.3	4.2	40	1.3	"			70	"	1.9	1.2	(0.7)	0.5	"									未完成品?		
49	"	6.6	4.0	55	1.8	安山岩			71	"	(2.5)	2.4	3.2	0.8	"									先端部欠損		
50	"	3.8	1.5	9	1.0	流紋岩			72	"	1.8	1.4	0.6	0.4	"									未完成品		
51	"	3.3	1.9	10	0.9	"			73	磨 石	7.6	8.1	3.50	4.2	溶結凝灰岩(跳躍)											
52	"	2.2	2.0	7	0.6	"	使用痕有り		74	"	9.8	9.5	51.0	4.1	"									"		
53	石核	3.2	2.4	1.2	1.5	"			75	"	10.9	9.4	69.0	4.8	"									"		
54	剥片	3.4	2.9	1.1	1.1	"																				
55	"	3.4	2.4	1.3	1.0	"																				
56	"	3.7	2.3	1.5	1.3	"																				
57	"	2.8	1.9	1.9	0.6	"																				
58	"	3.6	2.7	2.2	0.9	"																				
59	"	1.9	2.5	6	0.6	チヤー卜																				
60	"	6.7	1.8	1.8	1.3	流紋岩																				
61	石 繖	3.2	1.8	(4.5)	0.6	チヤー卜																				
62	"	(1.8)	1.55	(1.1)	0.3	安山岩																				
63	"	2.3	1.5	(0.9)	0.3	チヤー卜																				
64	"	2.1	1.1	(0.65)	0.25	"																				
65	"	2.6	1.3	(0.8)	0.5	"																				
66	"	(1.9)	(0.75)	(0.3)	0.3	"																				

長が10.9cm、最大幅が9.4cm、最大厚が4.8cm、重量が690gの楕円形で今回出土した磨石の中では最大である。使用面の片面は偏平で片面は丸みをおびている。

4. 集石遺構

ここから検出した集石遺構は2基（2～3号）で、南西側のアカホヤ層の残りの良いところを中心に検出できた。両方とも掘り込み、敷石ではなく、比較的小さな礫だけを数多く集め、ランダムに投げ置いた感じのものである。12号は扇形に近く最大長が1.5mである。礫は全て火を受けていた。13号は12号の北約2mのところに位置しており、ほぼ円形で、直径が1.5mである。礫は全て火を受けていた。

第2節 B区の遺物と遺構

1. 層序

B区は東西に走る町道の南側に位置しており、標高が約55mで、A区側より南に向かって緩やかに傾斜している。過去に建造物があったり、造園業者によって庭木用の樹木が植えられたりしており、土層の残りも非常に悪く、II層（アカホヤ火山灰層）以上は既に掘削されており、かろうじてIII層の中盤以下が残っている状態であった。ここでの層序は次のとおりである。

I層：掘削

II層：（アカホヤ火山灰層）掘削

III層：黒茶褐色土層。14～28cm。やや粘質を持つ火山灰層で、下部より遺物の包含が認められる。拳大の礫を少数含む。

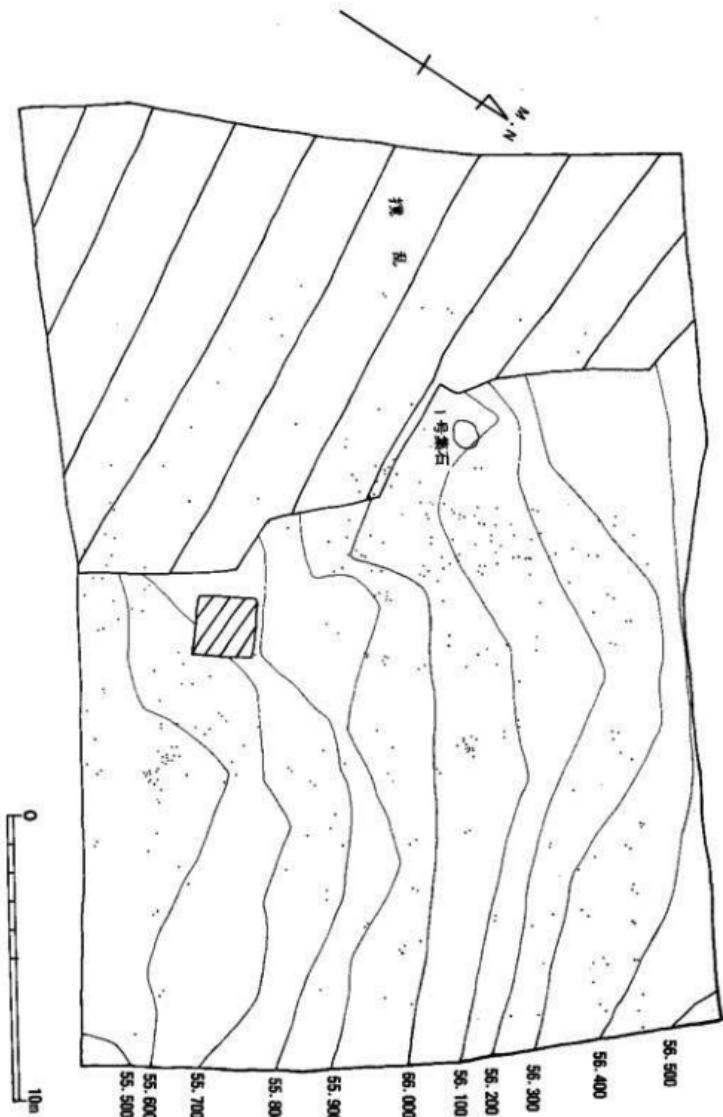
IV層：茶褐色土層。8～18cm。やや粘質の火山灰層。ややしまっており人頭大の礫が現れる。

V層：明茶褐色土層。4～8cm。かなり粘質の強い火山灰層で、非常に硬くしまり人頭大以上の礫を含む。

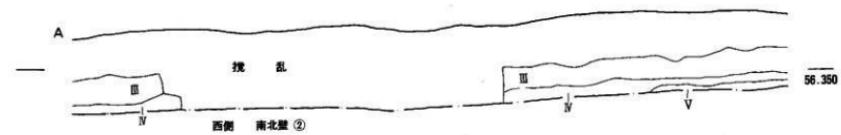
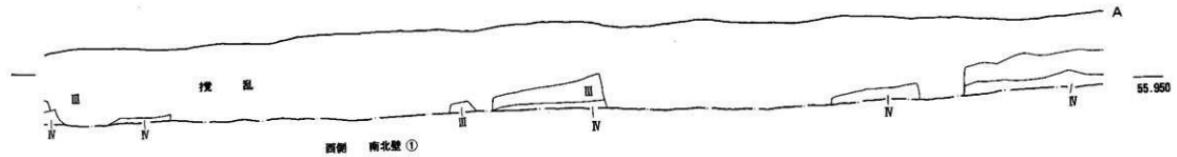
2. 上器

ここからは主に、III層（黒茶褐色土層）下部より押型文系土器（山形・楕円形）、貝殻文系土器（条痕文・刺突文）、櫛描波状文土器、細沈線文土器、無文土器が出土した。

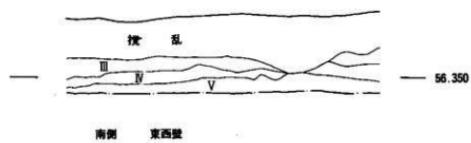
山形押型文は文様を横方向に施すタイプ（18、26）である。18は口縁がごくわずか



第13図 B区 遺跡・造構分布図



0 2m



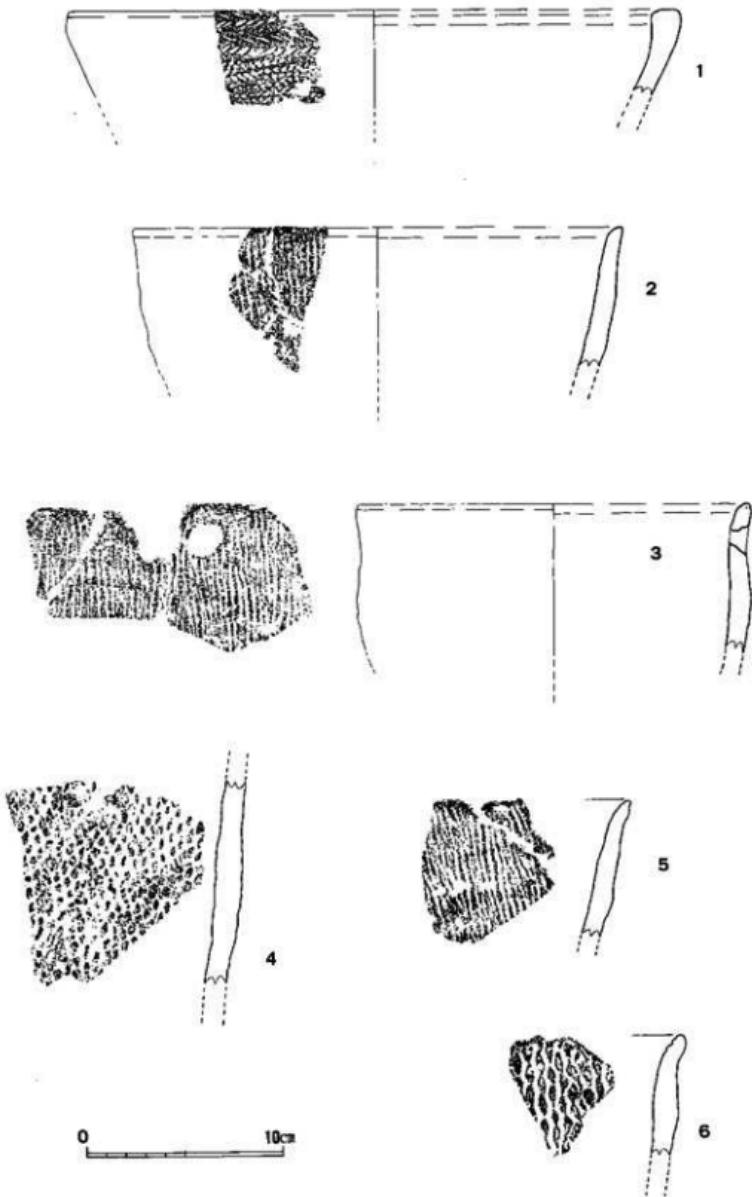
第14図 B区 土層図

であるが内湾し、外面は口唇部より丁寧な文様を施す。内面はナデ調整される。26は口縁がわずかであるが外反し、外面は口唇部をナデ調整し、頸部から胸部へ丁寧な山形押型文を施す。内面は口唇部に原体条痕を施し、頸部から胸部へ丁寧な山形押型文を施す。

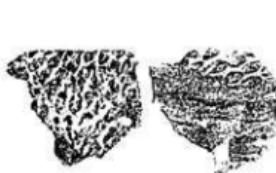
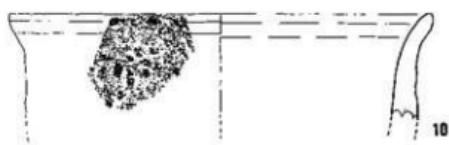
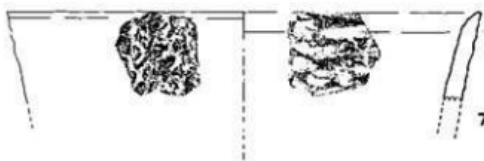
楕円形押型文は文様の方向を縱方向に施すタイプ（4、6～7、11～12、17、25、27～28）と横方向に施すタイプ（8、13、20、22、24、31）、内面と外面でそれぞれ違う方向に施すタイプ（14）がある。4はきめの細かい小さめの楕円形を外面に施しており、内面はナデ調整される。6は口縁が若干外反し、外面は縦に細長く楕円同士が連なった特徴のある文様を施す。内面はナデ調整される。7は口縁が直行し、外面は輪郭のはっきりしない大きめの文様を施す。内面は口唇部に幅の広い沈線を施し他はやや粗いナデ調整で押圧痕も残る。11は外面は円に近いやや小さめの楕円を施す。内面はナデ調整される。12は口縁がわずかであるが外反し、外面は頸部より丁寧な楕円を施す。内面は頸部より簡略化されたと思われる沈線文を施す。17は外面はかなり大きめのやや粗い楕円を施す。内面はナデ調整される。25は口縁がやや外反し、外面は頸部よりかなり丁寧できれいな楕円を施す。内面はナデ調整される。27は口縁がやや外反し、外面は頸部よりやや小さめの丁寧な楕円を施す。内面はナデ調整される。28は外面は形のふぞろいな楕円を施し、内面はナデ調整される。8は口縁がほぼ直行し、外面は頸部よりきめが細かく丁寧な楕円を施す。内面は口唇部にきめの細かい楕円を施し、頸部が無文帶になり胸部から再びきめの細か楕円を施す。13は外面がやや粗雑で円に近い楕円を施し、内面はナデ調整される。20は外面がやや大きめで形のあまりはっきりしない粗雑な楕円を施す。内面はナデ調整される。24は口縁がごくわずかであるが内湾し、外面は口唇部よりやや粗雑で大きめの楕円を施す。内面はナデ調整される。31は内外面とも細かい楕円を施すが、交互に無文帶が入ってくる。14は外面に形がふぞろいで粗い楕円が縦方向に施してあるが、内面はやや大きめで丁寧な楕円が横方向に施してあり一部分はナデ調整もされる。

貝殻条痕文は貝殻の腹縁部を使用して口唇部から縦方向に条痕を施すタイプ（2～3、5）である。2は口縁が直行し、外面は条痕と条痕の間隔がやや広めであるが丁寧に施文される。内面はナデ調整される。3は口縁がごくわずかであるが外反し、外面は条痕と条痕の間隔が狭く密に、そして丁寧に施文される。内面はナデ調整される。また、頸部に外面からの片面穿孔を有する。5は口縁がほぼ直行し、外面は条痕と条痕の間隔がやや狭く丁寧に施文される。内面はナデ調整される。

貝殻刺突文は横方向の平行刺突文と横ハの字状の文様を交互に施文するタイプ（1、21）と綾杉状の文様に施文するタイプ（19）である。1は口縁がやや内湾するが内側

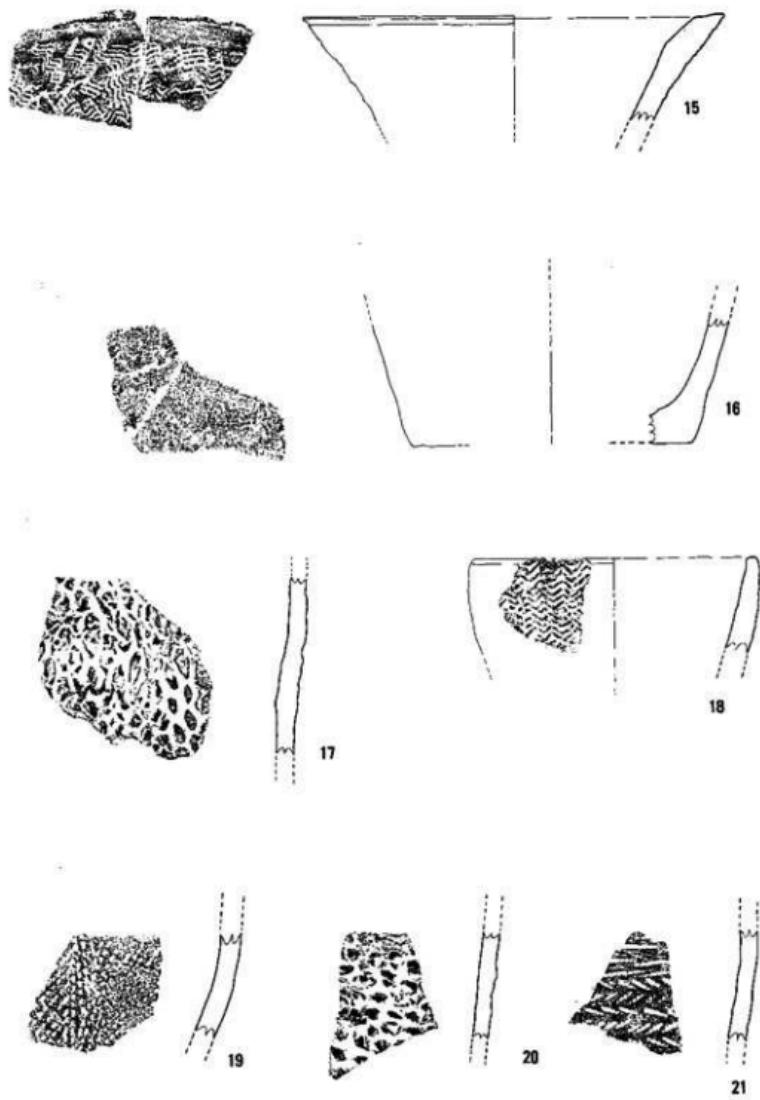


第15図 B区 土器実測図



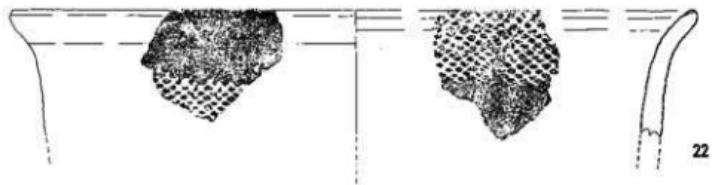
0 10cm

第16図 B区 土器実測図



0 10cm

第17図 日区 土器実測図



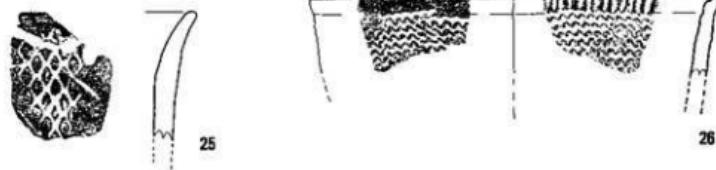
22



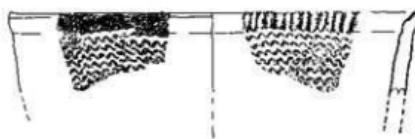
23



24



25



26



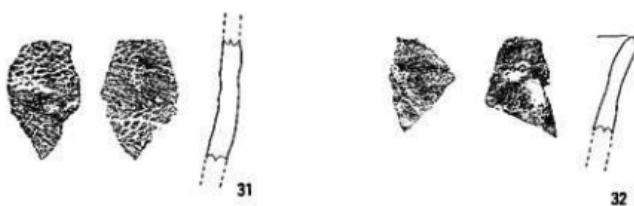
27



28



第18図 B区 土器実測図



第19図 B区 土器実測図

十一. 言語 雜記 素材 表 (2) B区

図面番号	器種	器部	調整及び文様		燃成	内面		調査	胎上	備考
			外面	内面		外面	内面			
1 B	円筒	口縁部	上勝類別判に就く。 唐草文捺壓。	ナ デ	良	褐灰	色	にぶい橙色	白・半透明・茶の1~2:1の強度及び透胎・點透胎を含む。	
2 B	鉢	口縁部 肩部	ていねいな縦方向 の貝殻条模文。	"	やや 不良	棕	色	にぶい褐色	灰色3:1の強度透胎・白・黒 透胎を含む。	
3 B	"	口縁部 肩部	"	"	"	"	"	"	"	
4 B	深鉢	肩部	きめのこまかい 柄円形押型文。	"	良	明赤褐色	灰褐色	茶・墨・半透明・茶の1:1の強度及び 2:5:1の強度透胎を含む。		
5 B	鉢	口縁部 肩部	ていねいな縦方向 の貝殻条模文。	"	やや 不良	棕	色	にぶい褐色	灰色3:1の強度透胎・白・黒 透胎を含む。	
6 B	"	口縁部	継方角柄円形押型 文。	"	良	にぶい黄橙色	灰黄褐色	白・茶2:1の強度透胎を含む。		
7 B	"	口縁部	粗雑な棒円形押型 文。	口唇部に幅の広い 沈線。	"	灰褐	色	橙	浅・白の強度を含む。	

二： 各種 食器 研究 表 (3) B区

箇面番号	器種	器部	調較及び文様		焼成	色調		胎土	備考
			外 面	内 面		外 面	内 面		
8 B	"	口縁部	輪郭にかけ重力形文。 0.5cmの深さ有る。	輪郭にかけ重力形文。 0.5cmの深さ有る。	良	上部 灰褐色	明赤褐色	白・茶2:4の釉被り白・茶 刷毛目有る。	
9 B	"	胴部	横方向円形押型文。	横方向円形押型文。	ナ テ	下部 明赤褐色	灰褐色	3:4の釉被り白・茶 (丸毛目有る)	
10 B	"	口縁部	やや小さめの棒円形押型文。	"	やや 不良	橙 色	橙 色	白・青・黄・青黒(有り無し) 刷毛目有る。	風化が著しい。
11 B	鉢	胴部	丸に近いやや小さめの棒円形押型文。	丸に近いやや小さめの棒円形押型文。	ナ テ	良	にぶい黃褐色	1~6ミリの茶・黒 刷毛目有る。	
12 B	"	口縁部	頸部に縦方向の棒円形押型文。	沈線の簡略化か? 円形押型文。	"	にぶい赤褐色	橙 色	黑・白2:3:1の釉被り白・茶 刷毛目有る。	
13 B	"	胴部	粗雑な棒円形押型文。	粗雑な棒円形押型文。	ナ テ	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色	茶5:5:5の釉被り白・茶で 刷毛目有る。	
14 B	深鉢	胴部	ねじ形押型文。	ねじ形押型文。	"	橙 色	にぶい黃褐色	3~4ミリの褐色斑点有り白 で白い刷毛目有る。	

I. 告白 録観 空文様 (A) B区

図面番号	器種	部	外 面		内 面		燒成	色	調 色	胎 土	備 考
			内 面	外 面	内 面	外 面					
15 B	鉢	口縁部 脚部	織機状の文様が波状に入る。	"	"	良	灰褐色	橙 色			男・女・焼成度0.5、引抜の織機を含む。
16 B	"	底部	風化が著しく判別不可能。	"	"	不良	橙 色	上部 暗灰色 下部 にぶい橙色	1:引抜で墨台・墨瓶が焼成され、引抜を含む。		
17 B	鉢	頭部 脚部	かなり大きめの縦方向格円形押型文。	"	"	良	にぶい黄褐色	上部 明赤褐色 下部 暗灰色	茶白・墨(先駆歴度2~3)で 白系の織機を含む。		
18 B	鉢	頭部 脚部	きめのこまかいU形神型文。	"	"	"	明赤褐色	灰 色	1:引抜で墨台・墨瓶が 焼成を含む。		
19 B	"	頭部	貝殻剥突による縦杉木の文様。	"	"	"	黄灰色	にぶい蜜柑色	2:引抜で白系の織機を含む。 煅下の織機を含む。		
20 B	"	"	大きめで粗い格円形神型文。	"	"	"	橙 色	にぶい赤褐色	5:引抜で白系の織機度0.5まで 白系の織機を含む。		
21 B	"	"	上部織機吹付。 下部織機吹付へのびん。	粗いナメ	"	にぶい橙色	灰 白 色	白系の織機度1:織機度0.5: 引抜を含む。			

土 告 び 錄 査 索 及 び 文 様 (ち ら) B 区

因面番号	器種	器部	外 面		内 面		焼成	色	調	胎	土	備 考
			外 面	内 面	外 面	内 面						
22 B	深鉢	口縁部 肩部	勝りきかにかけ山形押 ぎ文。	口縁～裏にかけ山形押 ぎ文の跡が残す。	良	明赤褐色	にぶい赤褐色	白・茶・青・黄褐色で2:1以下の割合。 無鉢を含む。				
23 B	"	口縁部 肩部	口縁部に山形押 ぎ文の跡がある。	"	ナ デ	"	黄灰色	黄灰色	白・茶・青・黄褐色で0.5:4以下の 割合。			
24 B	鉢	口縁部	大きめの梢円形押 ぎ文。	頸部にやや大きめ の梢円形押ぎ文。	"	明赤褐色	明赤褐色	白・茶・青・黄褐色で3:1以下の 割合。				
25 B	"	口縁部 頸部	縦方向のきれいな 梢円形押ぎ文。	ナ デ	"	口縁部 頸部	褐灰色 橙色	暗赤灰色	白・茶・青・黄褐色で6:1以下の割合。			
26 B	"	口縁部 肩部	頸部よりきれいな 山形押ぎ文。	口縁部に短沈線。 残りは山形押ぎ文。	"	にぶい黄橙色	黄灰色	白・茶・青・黄褐色で0.5:4以下の 割合。				
27 B	"	"	さめのこまかい梢 円形押ぎ文。	ナ デ	"	にぶい赤褐色	明赤褐色	白・茶・青・黄褐色で0.5~ 5:4までの割合。				
28 B	"	肩部	やや大きめの梢円 形押ぎ文。	"	"	橙色	褐灰色	白・茶・青・黄褐色で2:1以下の 割合。				

土 告 告 風 観 極 表 (G) B 区

國面番号	器種	器部	外 面		内 面		燒成	色	調	胎 土	備 考
			外	面	内	面					
29 B	"	横 ナ デ	"	"	"	"	やや 良	淡黃色	反黃色	白・半透明褐色結合。	
30 B	"	頸部 脣部	丸に近くやや粗い 橢円形押型文。		頸部にやや広めの 沈線。	良	褐灰色	橙 色	半透明・白・墨 5~8:10#	颗粒状結合。	
31 B	"	脣部	全体黒斑點が導かれて り計。		一部きめのこまか い橢円形押型文。	"	明赤褐色	明赤褐色	半透明・墨・白 5:10#	結合	
32 B	"	口縁部 脣部	"	"	"	"	にぶい褐色	橙 色	5:10#	白・墨の結合。	

の方に厚めとなっている。外面はやや小さめの右方向の横ハの字で、下に平行刺突文が施文される。内面はナデ調整される。21は外面に横方向の条痕文を施し、その下に左右方向の横ハの字状の刺突文が施文される。内面は粗くナデ調整される。19は外面に縦方向、右から左斜め方向に連続刺突文が施文されており、綾杉状の文様を呈している。

櫛描波状文土器は15の1点のみであるが、口縁がわずかであるが外反しながら大きく開く中型の鉢で、外面の頸部から櫛状工具を使用したと思われる方向を定めない櫛描波状の文様を施す。口唇部は櫛描波状文を施文した後にナデて文様を消したと思われる。内面はナデ調整される。

細沈線文上器は23の1点のみであるが、口縁がわずかに内湾し、口径が29.4cm、厚みも1.4cmとかなり厚手で大型の深鉢である。外面は口唇部に棒状工具を使用したと思われる横方向の細沈線が平行に4本入り、頸部から胴部にかけて同じく棒状工具と思われるハの字状の短沈線を施す。内面はナデ調整される。

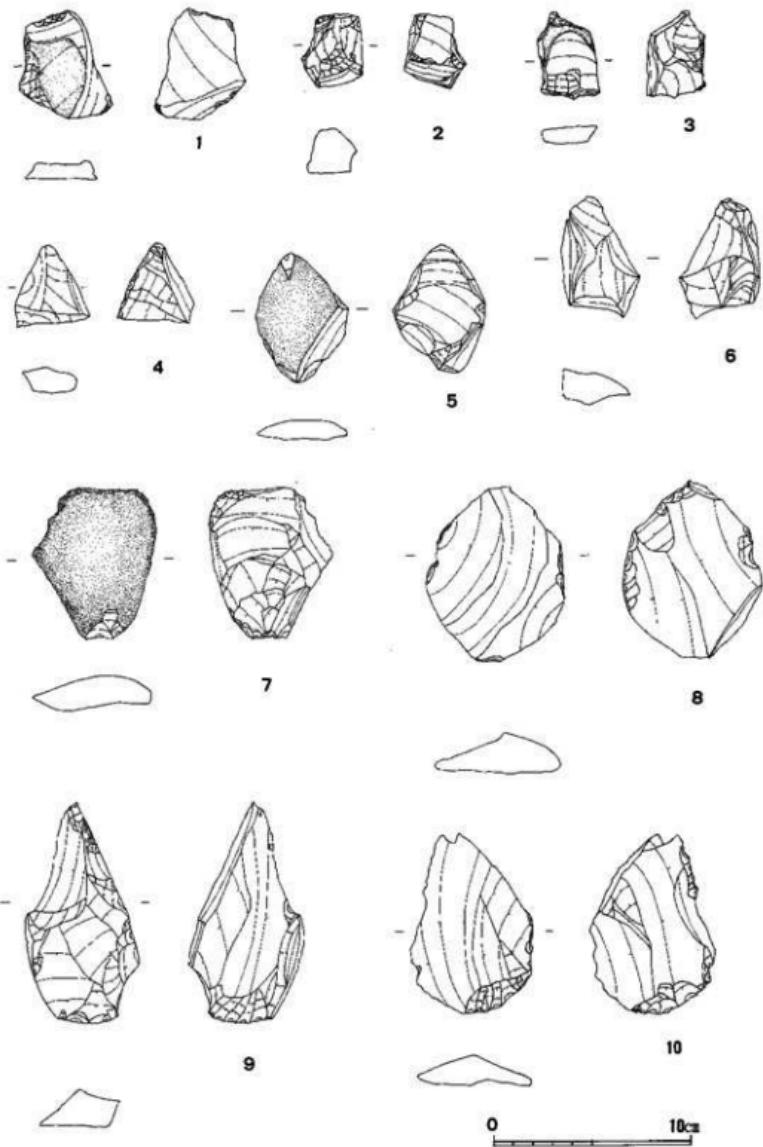
無文土器は29の1点のみであるが、外面は左下から右斜め上への横ナデで調整される。内面もナデ調整される。

3. 石 器

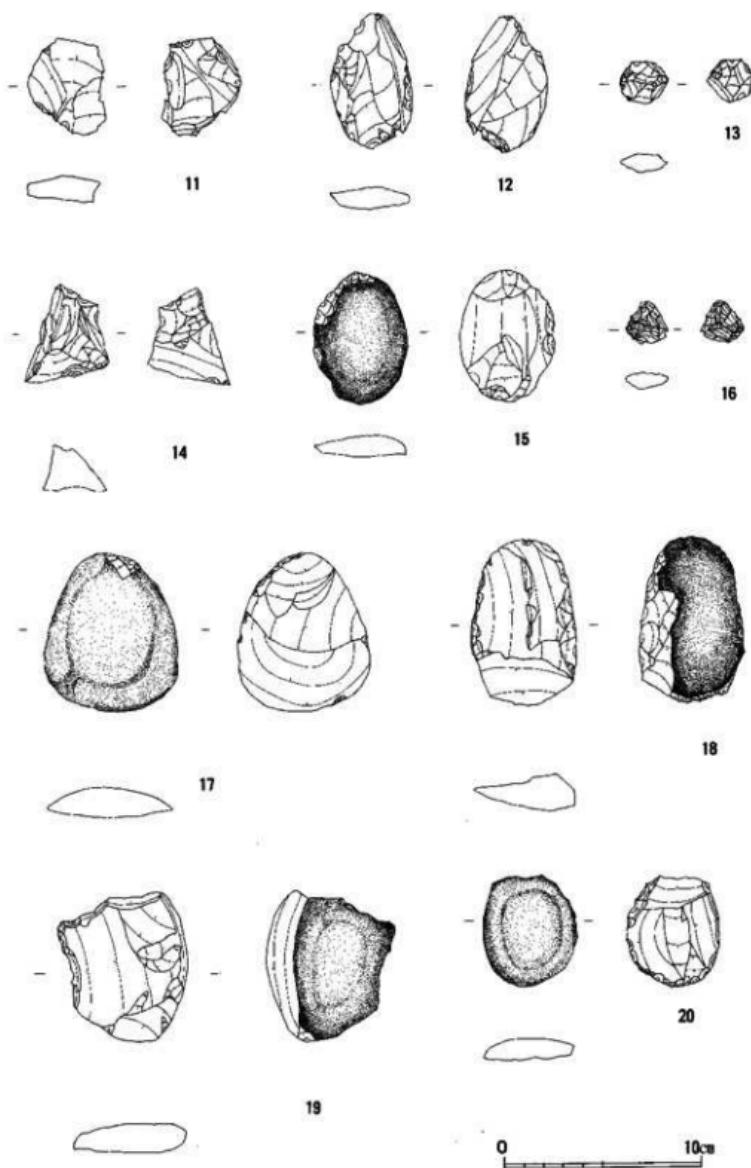
ここから出土した石器は、剥片、使用痕を有する剥片、石鏃、石匙である。

1～6は流紋岩製の剥片である。1は片面に自然面を残す。3は片面に一部自然面を残し、使用痕を有する。4は使用痕を有する。5は片面に自然面を残す。7は砂岩製の剥片で、片面に自然面を残す。8～12は流紋岩製の剥片である。10は使用痕を有する。12は使用痕を有する。13はチャート製の剥片で一部分に粗い加工を施し、使用痕を有する。14は流紋岩製の剥片である。15は砂岩製の剥片で全周の1/4に加工を施し、使用痕を有する。片面に自然面を残す。16はチャート製の剥片である。17～22は砂岩製の剥片である。17は一部分に加工を施し、使用痕を有する。片面に自然面を残す。18は全周に加工を施し、使用痕を有する。片面に自然面を残す。19は一部分に加工を施し、使用痕を有する。片面に自然面を残す。20は全周の2/3に加工を施し、使用痕を有する。片面に自然面を残す。21は一部分に加工を施し、使用痕を有する。片面に自然面を残す。22は片面に自然面を残す。23は流紋岩製の剥片である。24は全周に加工を施し、使用痕を有する。片面に自然面を残す。25はチャート製の剥片である。

26～52は全てチャート製の石鏃である。形態的には26～32、34～42、44～48、50、52は凹基式、33、43、49、51は円基式（尖頭状石器）に分類される。26は比較的浅い



第20図 B区 石器実測図



第21図 B区 石器実測図



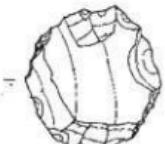
21



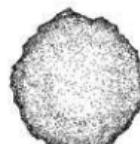
22



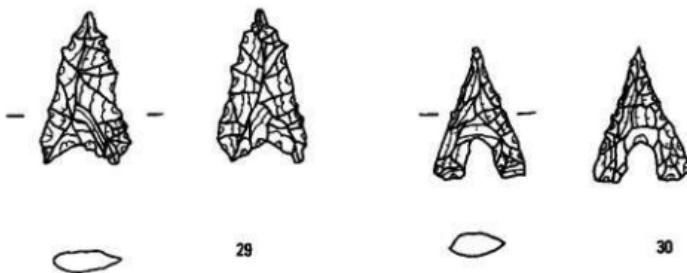
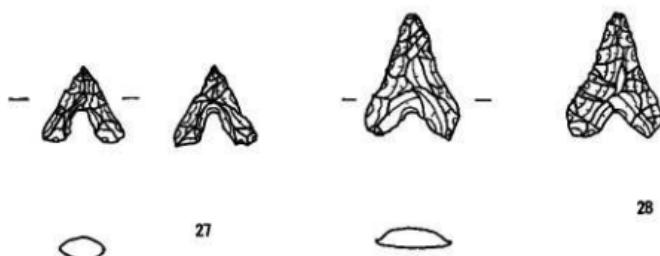
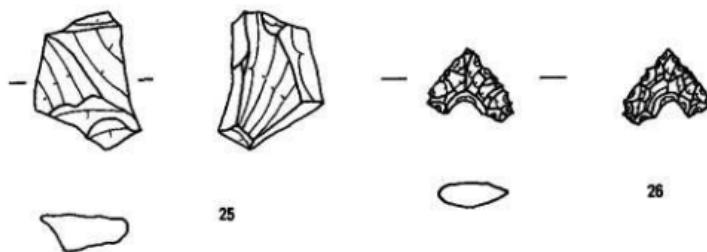
23



24



第22図 B区 石器実測図



第23図 B区 石器実測図



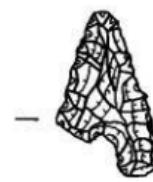
31

32



33

34



35

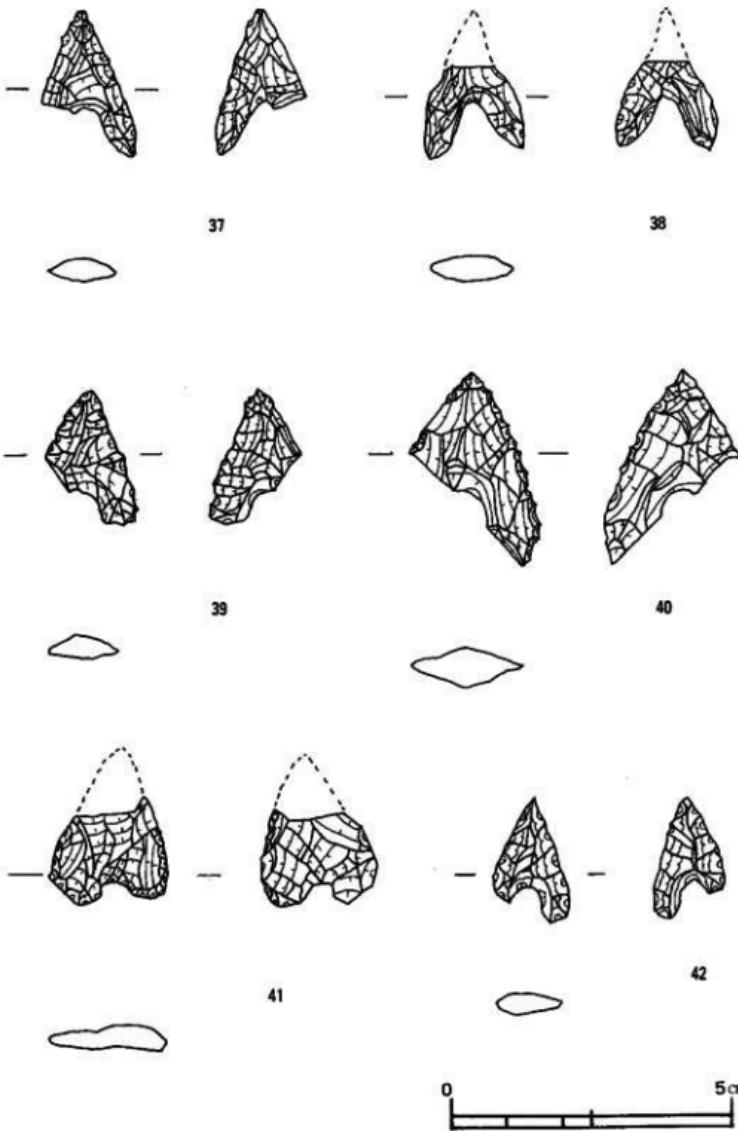
36



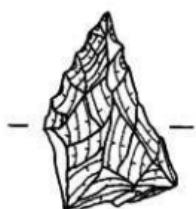
0

5 cm

第24図 B区 石器実測図



第25図 B区 石器実測図



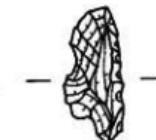
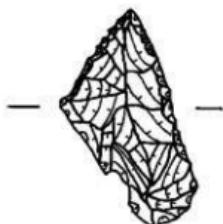
43

44



45

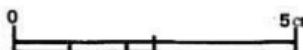
46



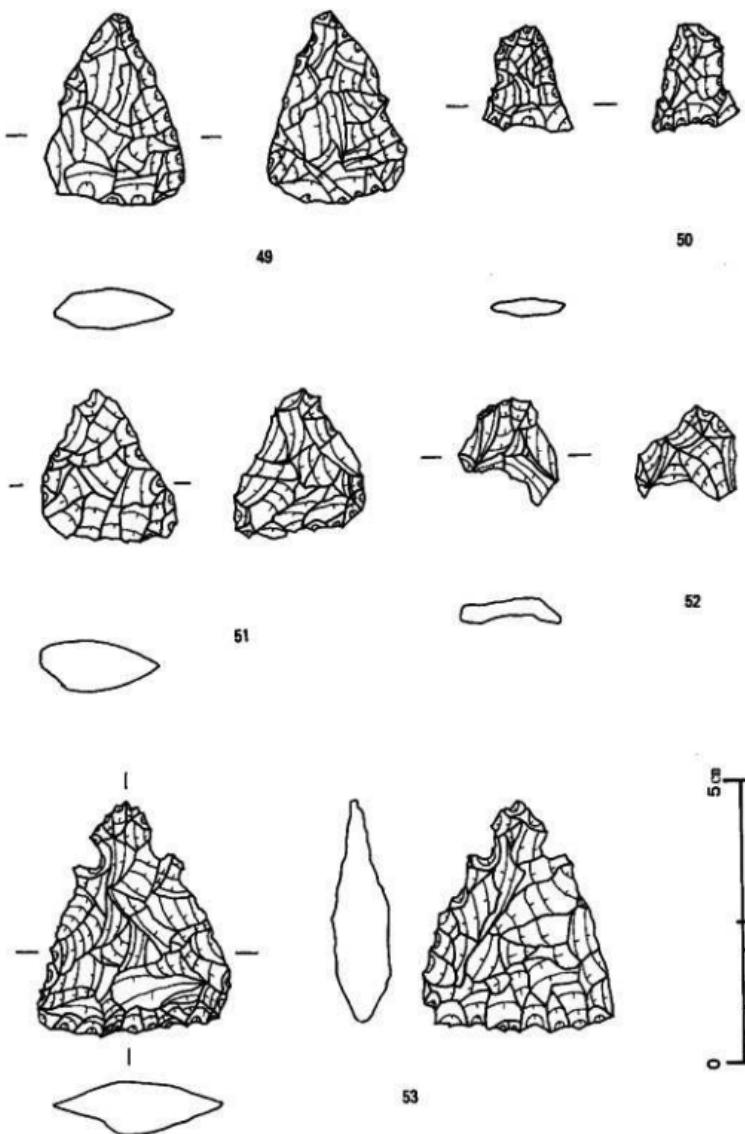
48



47



第26図 B区石器実測図



第27図 B区 石器実測図

石 器 計 測 表

B (3)

番号	種 別	最大長 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	最大厚 (cm)	石 材	備 考	番号	種 別	最大長 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	最大厚 (cm)	石 材	備 考
1	剥 片	5. 5	4. 7	2. 2	0. 9	流紋岩		23	剥 片	9. 0	5. 4	60	1. 3	流紋岩	
2	"	4. 2	3. 0	2. 7	2. 1	"		24	"	7. 4	6. 9	81	1. 4	砂 岩	他用痕有り
3	"	4. 8	2. 9	1. 0	0. 8	"	使用痕有り	25	"	2. 6	1. 7	9	0. 6	チヤト	
4	"	4. 5	3. 8	1. 5	1. 2	"		26	石 磚	1. 4	1. 3	0. 45	0. 3	"	
5	"	6. 4	4. 8	3. 5	1. 3	"		27	"	1. 5	1. 0	0. 3	0. 3	"	
6	"	6. 4	3. 9	2. 7	1. 2	"		28	"	2. 4	1. 6	0. 6	0. 3	"	
7	"	7. 9	6. 0	7. 5	1. 6	砂 岩		29	"	2. 8	1. 6	1. 85	0. 3	"	
8	"	9. 0	7. 1	12. 9	2. 1	流紋岩		30	"	2. 4	1. 3	3. 9	0. 4	"	
9	"	11. 2	5. 5	10. 3	2. 0	"		31	"	1. 7	1. 1	0. 45	0. 3	"	
10	"	9. 1	6. 2	9. 3	1. 8	"	使用痕有り	32	"	1. 5	1. 1	0. 25	0. 2	"	
11	"	4. 7	3. 8	1. 3	1. 4	"		33	"	2. 0	1. 6	1. 45	0. 5	"	
12	"	6. 3	4. 0	3. 0	1. 0	"	使用痕有り	34	"	(2. 2)	1. 4	(0. 6)	0. 3	"	
13	"	2. 1	2. 5	8	0. 9	チヤト	-	35	"	3. 1	1. 7	(1. 4)	0. 5	"	
14	"	5. 2	4. 4	4. 0	2. 7	流紋岩		36	"	3. 0	1. 7	(1. 4)	0. 4	"	
15	"	6. 7	4. 8	4. 0	1. 1	砂 岩	他用痕有り	37	"	2. 7	1. 4	(1. 05)	0. 4	"	
16	"	2. 1	2. 2	1. 1	0. 7	チヤト	-	38	"	(1. 9)	(1. 4)	(0. 75)	0. 3	"	
17	"	8. 0	6. 8	9. 8	1. 4	砂 岩	他用痕有り	39	"	2. 5	1. 5	(0. 95)	0. 3	"	
18	"	8. 3	5. 3	7. 5	1. 6	"		40	"	3. 6	2. 0	(2. 55)	0. 6	"	
19	"	7. 6	6. 8	8. 5	1. 4	"		41	"	(1. 75)	(2. 1)	1. 1	0. 3	"	
20	"	5. 7	4. 8	3. 9	1. 2	"		42	"	2. 2	1. 3	(0. 6)	0. 3	"	
21	"	7. 1	4. 3	3. 3	1. 0	"		43	"	3. 55	(2. 1)	(4. 5)	0. 6	"	
22	"	8. 0	6. 0	7. 2	1. 6	"		44	"	2. 4	1. 1	(0. 9)	0. 5	"	

石 告 錄 表 (4) B 区

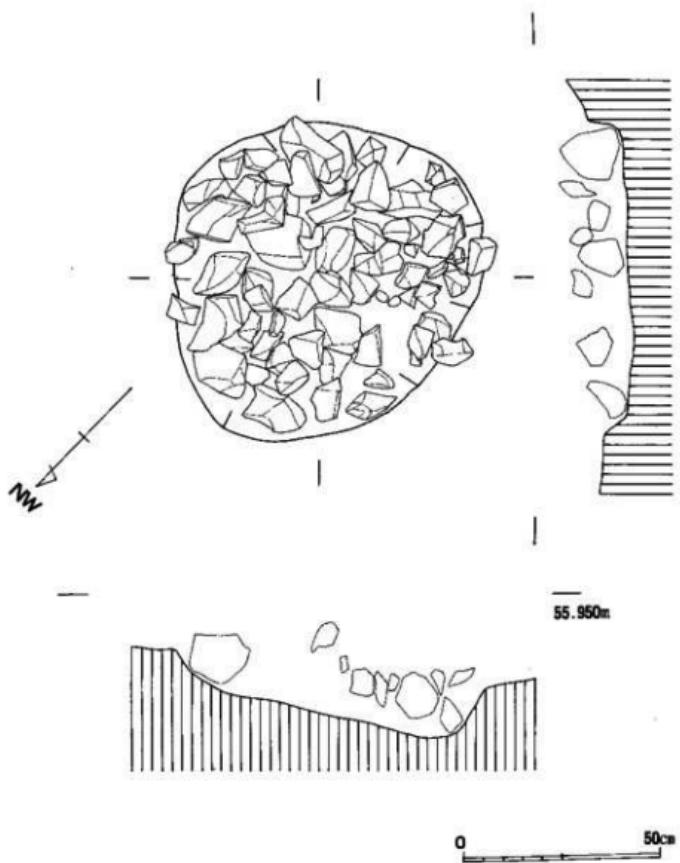
番号	種 別	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重 量 (kg)	最 大 厚 (cm)	石 材	備 考	番号	種 別	最 大 厚 (cm)	重 量 (kg)	最 大 厚 (cm)	石 材	備 考	
45	石 鏟	(2. 8)	2. 3	(1. 9)	0. 4	手 + 一卜	頭部欠損								
46	"	3. 8	1. 3	(2.05)	0. 5	"	片脚部欠损								
47	"	3. 9	(2. 5)	(3. 3)	0. 5	"	"								
48	"	(2. 4)	1. 1	(0.55)	0. 3	"	未完成品?								
49	"	3. 3	2. 4	3. 5	0. 7	"									
50	"	1. 9	1. 5	1. 2	0. 2	"	未完成品?								
51	"	2. 9	2. 6	0. 85	0. 8	"	未完成品								
52	"	(1. 6)(1. 8)	0. 55	0. 3	"	"									
53	石 鏟	4. 0	3. 3	5. 5	0. 9	黑曜石	巾着型								

抉りで正三角形に近い形を呈する。27は正三角形を呈しているが、26に比べると抉りも深く細身である。28は抉りがV字形を呈しており、調整も細かく施す。29は抉りが長いが長身で調整はやや粗い。30は抉りが深くU字形を呈するもので、いわゆる鍬形鐵といわれるものである。両側辺は直線きみで、調整は細かくされる。31は抉りは深いが角度が緩やかで広めのV字形を呈する。32は両側辺が屈曲しており、抉りが浅くなっている。34は両側辺がほぼ直線で抉りの角度もやや緩やかになっている。35は両側辺の脚部が屈曲しているが、頭部先端部までは直線で伸びきる。抉りはやや幅の広いU字形を呈する。36は鍬形鐵で、抉りも深くU字形を呈する。調整は細かく施す。37は抉りが深く角度も広めで、V字形を呈する。38は35と同様で両側辺の脚部が屈曲するが、頭部先端部までは直線で伸びきるタイプと思われる。抉りはやや幅の広いじ字形を呈する。39は鍬形鐵に属するが、抉りの角度もやや広めで、調整も粗くなっている。40は最大長が3.6cmで大型である。両側辺はなめらかに屈曲し、すんぐりした形状を示す。脚部端を意識的に除去している。調整は細かく施す。41は比較的浅い抉りを行っている。調整は粗く施す。42は鍬形鐵に属する。抉りはやや深めでU字形を呈する。44は抉りがやや浅く幅の広いU字形を呈しているため脚部が貧弱になっている。45は鍬形鐵に属するが、最大長が現存部分だけで2.8cmあり、もともとは3.5cmを越える大型のものであったと思われる。抉りは深くじ字形を呈する。46は鍬形鐵に属するが、最大長が3.8cmと大型で、調整は細かく片側辺が鋸歯状の刃部が形成されている。47は最大長が3.9cmと出土した石鐵の中では最大である。抉りはやや浅めで幅が狭いため脚部が大きく、すんぐりした形状を示す。調整は細かく施す。48、50、52は石鐵の未完成品であると思われる。33、43、49、51は尖頭状石器とも呼ばれる円基式の石鐵であるが、33は調整は細かく丁寧な作りである。43は最大長が3.5cmと大型である。全体の作りは比較的雑であるが、刃部は比較的丁寧な調整がされている。49は最大長が3.3cmでやや大型である。作りはやや雑である。51は最大長が2.9cmで中型のものである。作りは粗い。

石匙は53の1点のみである。これは黒曜石製で巾着形といわれるものである。頭部の両端を抉る加工を施す。作りも丁寧で刃部は細かい調整を行っている。

4. 集石遺構

ここでは、Ⅲ層下部よりⅣ層上部にかけての掘り込みを有する集石遺構が1基(1号)検出された。集石は長軸が86cm、短軸が81cmの規模を有し、ほぼ円に近いものであり、約13cmの掘り込みが確認された。集石には敷石・台石は認められず、15~30cmの角礫、円礫を使用している。礫のほとんどは加热による変色がみられる。



第28図 B区 1号集石実測図

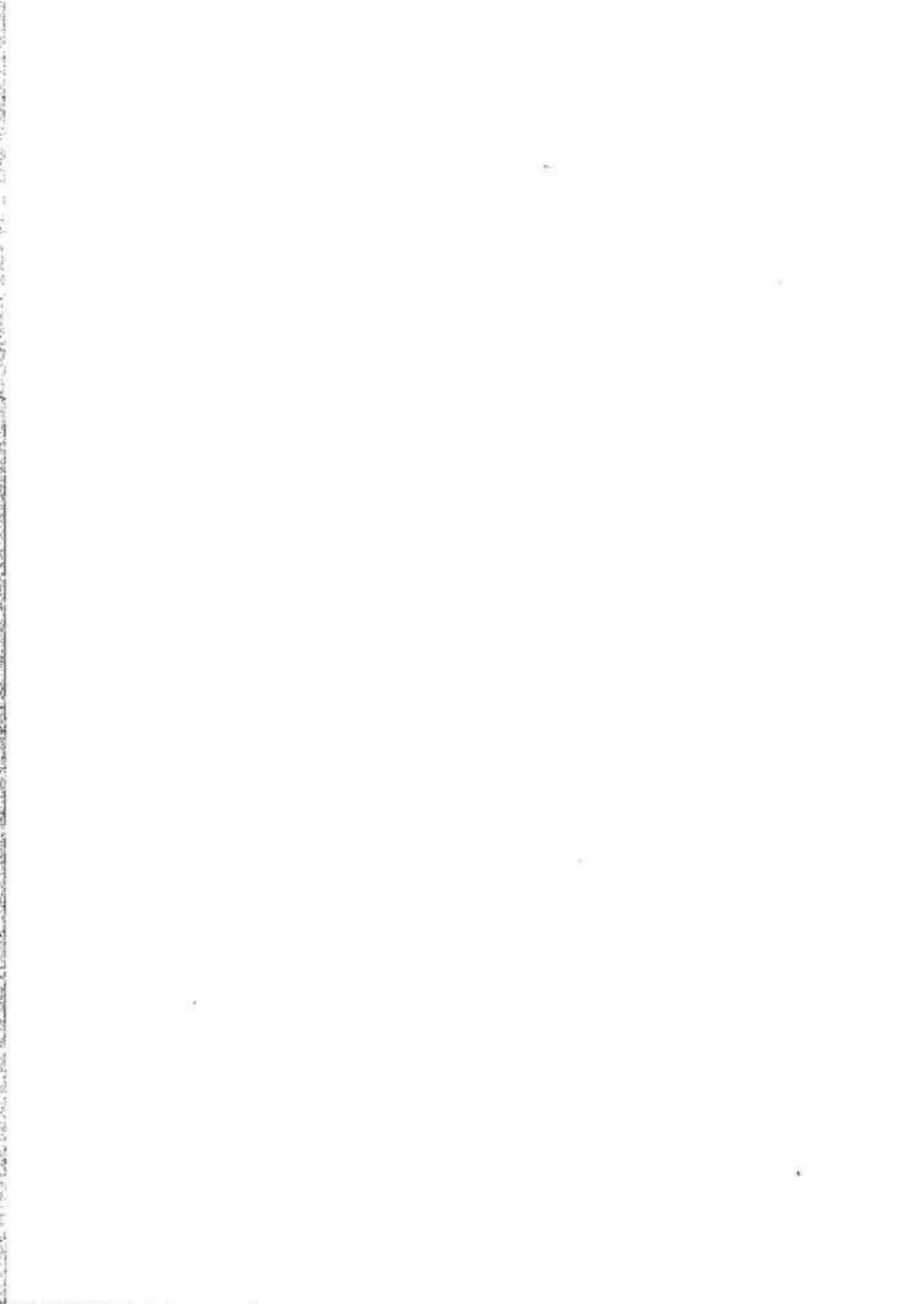
第4章 まとめ

今回の調査では、A・Bの両区を合わせて約5,000m²であったが、縄文早期の遺物、遺構を中心に貴重な成果を得られた。この地はもともと水利の便に富んでおり周辺には不動の滝や白水の滝などが所在し、かなりの水量を恵んできたと思われる。このため古代から今日まで人々の生活にとって最高の立地条件を備えていた。したがってこの地周辺では戦後よりかなり頻繁に遺物の採集が行われており、かなりの量の遺物が集められていると思われる。これら過去の資料と今回の資料をうまく活用し、この時期の縄文年作業を進めていかなければならない。

本町において過去に縄文早期の調査例は全くなく、周辺地域の出土資料との比較研究を進めていかなければならない。近年の調査例として宮崎学園都市遺跡群、田野町の大神河内第1遺跡、西郷村の内野々遺跡、延岡市の今井野遺跡があるが、これらの遺跡の資料を参考にしなければならない。

また、今回の調査では確認できなかったが、周辺の畠地から弥生土器が数点表採されたため弥生時代以降の遺跡が存在していたと思われる。

これらの遺物・遺構が本町の歴史的解明を進める上で貴重な資料になり得ることを確信し、今後の研究成果に大いなる期待が寄せられる。



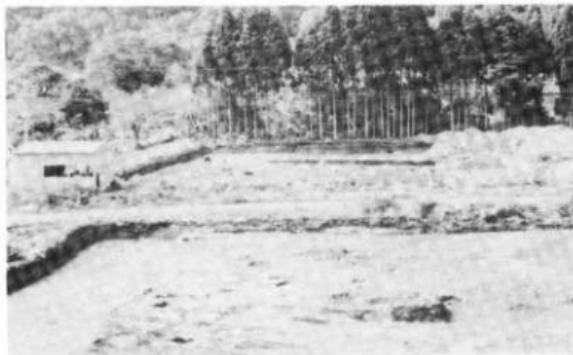
図版



A区近景
(東から)



B区近景
(東から)



A・B近景
(南から)



作業状況

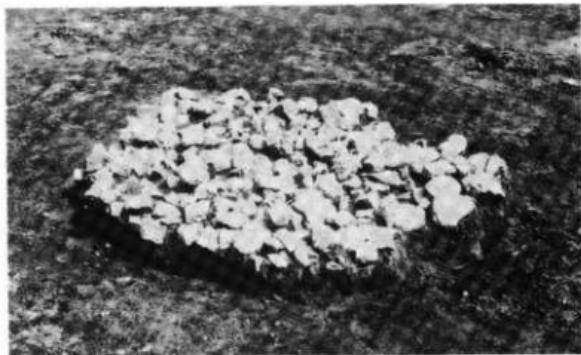


1号集石

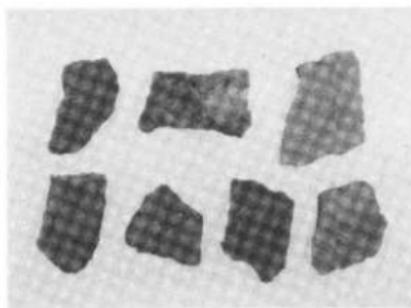


2号集石

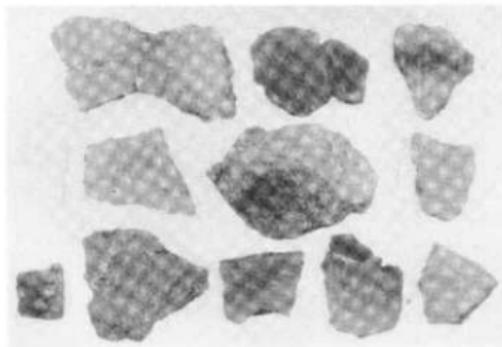
図版 2



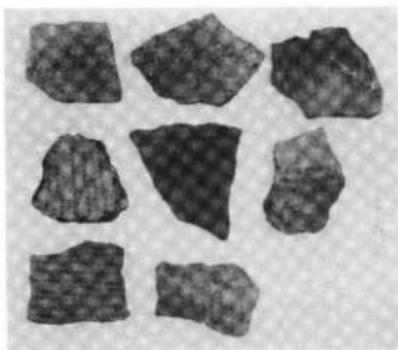
3号集石



山形押型文



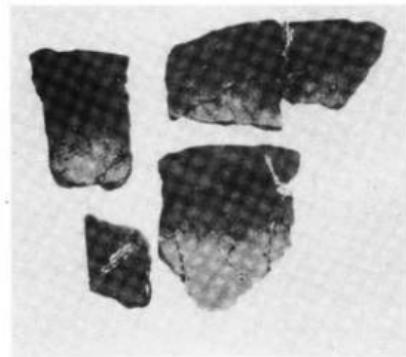
隋円形押型文



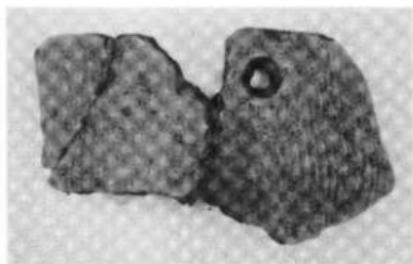
貝殼刺突文



貝殼條痕文



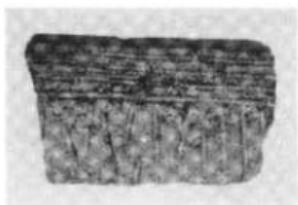
梯描波狀文



貝殻条痕文



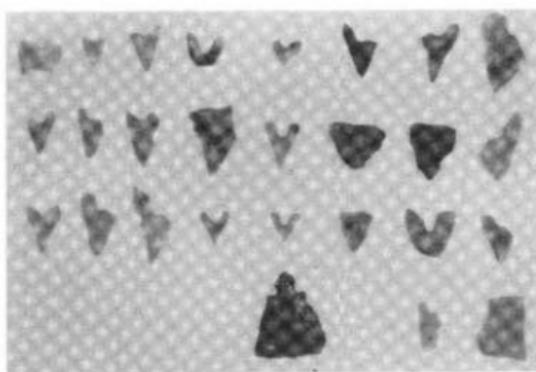
貝殼条痕文



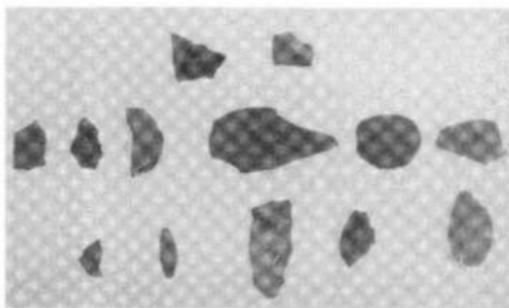
棒状工具による条痕文



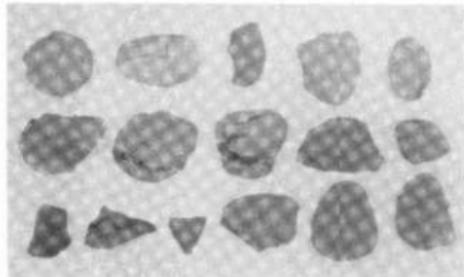
石匙



石鏃



剥片



剥片

都農町文化財調査報告書 第4集
黒石遺跡

発行年月 平成4年3月31日

編集・発行 都農町教育委員会

印 刷 有限会社尾形印刷